

シンポジウム
「私たちの大切な海・伊勢湾」
～ 連携と協働～

講 演 録

日時：平成14年11月23日（土）

午後1時20分～午後4時30分

場所：三重県津市 三重県水産会館大会議室

主催：三重県

シンポジウム

私たちの大切な海・伊勢湾

～連携と協働～

日時 11月23日（土） 午後1時20分～4時30分

場所 三重県水産会館 大会議室

主催 三重県



プログラム

1時20分 開会

1時30分～2時30分 基調講演

「日本の母胎・伊勢湾を生かす道は」

目崎 茂和 氏（南山大学総合政策学部教授）

2時30分～2時45分 休憩

2時45分～4時30分 パネルディスカッション

コーディネーター

野田 宏行 氏（三重県総合企画局特別顧問）

パネリスト

柏木はるみ 氏（TSU・アイリス代表）

久米 宏毅 氏（緑のネットワークみえ・

自然環境創造協会理事長）

畑井 育男 氏（三重県漁業協同組合連合会指導部長）

目崎 茂和 氏（南山大学総合政策学部教授）

シンポジウム「私たちの大切な海・伊勢湾 ～連携と協働～」

基調講演 ……………p.8

パネルディスカッション……p.31

司会

皆様、本日はお忙しいところご来場いただきまして誠にありがとうございます。ただ今から「私たちの大切な海・伊勢湾」と題しましてシンポジウムを始めさせていただきます。私、本日の進行役を勤めさせていただきます三重県職員の中村純子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず本日のシンポジウムの趣旨などにつきまして三重県総合企画局企画・総合行政チームの原田よりご説明申し上げます。

原田

企画・総合行政チームの原田でございます。本日は大変お忙しい中、貴重な時間を割いていただきまして当シンポジウムに出席いただき誠にありがとうございます。

シンポジウム開催に当たりまして、このシンポジウムの趣旨等につきまして簡単にではございますがお話を申し上げたいと思います。

本日、皆様方には伊勢湾再生ビジョン策定調査報告書概要版という資料をお配りいたしました。このビジョンは平成11年、平成12年の2ヶ年度におきまして三重県で策定したものでございます。ビジョン策定委員会というものを設けまして策定をいたしました。本日、基調講演をいただくことになっております目崎先生が座長になっていただきました。また後段のパネリストとしてご出席をいただいております

三重県漁連の畑井さんが、委員としてご出席いただいて議論をしていただいたところでございます。今回のシンポジウムの開催はこのビジョンの延長線上といたしますか、普及・啓発活動の一環として開催させていただいたものでございます。今日、そのビジョンの主旨の詳細については時間の関係上ありませんので触れることはできませんけれども、このビジョンの再生の主旨といたしますか、理念というのが概要版の5ページに書いてございます。次世代への健全な伊勢湾の継承というふうに書かれてございます。その理念というのは今の子供たち、あるいはこれから生まれてくる子供たちが社会の中核を担う、そういった概ね50年先に伊勢湾を健全な姿にさせたいという姿勢・決意を込めて作ったものでございます。

しかしながら一口に伊勢湾の再生と申し上げましてもそんなに簡単にできるものではございません。三重県の一団体に再生ができるものとも考えておりません。やはり今日お集まりの皆様方、皆様と多様な主体が協働、連携のもとにやってこそ初めて伊勢湾の再生というものが可能になるのではと私は思っております。伊勢湾の再生につきましては、三重県としまして現に環境活動等の取組をしている皆様方、あるいはこれからそういった活動に取り組まれようと考えている方々、そういった方々と一緒になって取組をやっていきたい。三重県もそういった団体の一つとして取組をやっていきたい。そしてそれぞれの団体の持つお互いの強みというんですか、そういうものを活かしながら連携・協働でやっていきたい。伊勢湾についてみんなで考えていきたい。そういうことが今回のシンポジウム開催の趣旨でございます。

私はそのような思いを抱きながら、この業務を担当しましてほぼ9ヶ月になるんでございますが、自然科学とか人文科学、あるいは社会

科学の本を読んでいろいろ勉強はしてみたんですけども、そもそも伊勢湾の海岸というものを実際自分の目で見て歩いてみなければどうい状態になっているのかわからないだろうと思ひまして、この4月から名古屋港から三重県の二見町の神前岬というのがあるんですが、一通り三重県側は自分なりに歩きました。何回か複数回行った所もござひます。残念ながら三河湾のほうにつきましては2、3度といひますか数えるばかりなのでござひますが、そういった体験をもとにして私が抱きました、感じました印象というのかそういうことをちょっとお話し上げたいと思ひます。

一つは今月の18日にラムサール条約というのに登録されました藤前干潟というのが名古屋市にござひます。ここへも初めて行きました。そこで目にしましたものは海側に散乱したゴミでござひました。翌日の新聞なんかにはそこには針のついた注射器等が捨てられている。こんな記事もござひました。私はそのときにそんな注射針などが捨てられて本当にラムサール条約に登録されるんだらうかと大変心配いたしました。でも幸ひにしてこの18日に登録されました。これまで登録に向けて活動を続けられてきた方々の努力の賜だと思ひております。また同様に四日市港管理組合の管轄区域でも産業廃棄物の不法投棄というのがありました。これは以前から噂があったということで、警察の方が張り込みをされておひまして投棄者、犯人が捕まったわけでござひますが、私も四日市港のポートタワーに行きまして「場所は何処なのと」聞きましたところ、川越町のところに高松干潟というのがあるんですけども、ちょうどその隣ぐらひでござひました。三重県の高松干潟を守る会というのがあるんですけども、その干潟の隣に産業廃棄物が捨てられていた。そういう状況でござひます。

二見町に二見が浦海水浴場があるんですが、これは今日お手元に皆さんにお配りはできていないんですが、伊勢湾再生ビジョン策定調査報告書の中で豆知識という中で紹介させていただいておりますが、二見が浦海水浴場というのは日本で初めて海水浴場として指定されたんですけれども、ここへ行きました。ちょうど夏休み頃で中学生たちが、県外の中学生たちでしたか、ふんどしいっちょで最近珍しく遠泳の練習というんですか、そういうのをやっておりました。ただ浜というのがほとんどなくて、階段、護岸というのかそこに腰掛けながら泳いでいまして、もっと浜が豊かであればいいのになと思いつつと残念にかわいそうに思いながら私は見ておりました。

今年の9月には本日パネリストとしてご出席を願っております久米さん、あるいは柏木さんらが中心となりまして阿漕浦で薪能というのを催しされております。これも見に行きました。あいにく月は出ておりませんでしたけれども、それに加えて私自身、能という文化の方面にもあまり詳しくないせいもあって演じたものがよくわからなかったんですけれども、その中で特に印象に残ったのは昼間行けばそんなに感じないであろう波の音が、夜の中で能の合間合間に、演技の合間合間にほんとうにざざっという音で聞こえてくるんです。舞台は照明で照らされて周りにはかがり火が焚かれているんですけれども、海は暗くて見えないんです。でも波の音がざざっという音で聞こえてくるんです。それが特に印象に残りました。行ってよかったと思います。

もう一つなんですが、本年度三重県としまして、伊勢湾再生のための普及・啓発活動の一環としまして、小学校5、6年生から高校生を対象にしまして伊勢湾への思いということで作文募集をいたしました。伊勢湾再生事業のPRと作文募集のお願いということを兼ねまして、

沿岸域にある小・中学校、あるいは環境活動に熱心に取り組んでいる学校を訪問いたしまして、校長先生たちといろいろお話をいたしました。その中で2点ほど私自身印象に残ったことがございます。一つはある町の小学校なんですけれど、そこには素晴らしい良好な海水浴場があるんです。しかしその子供たちというのは海水浴場にほとんど泳ぎに行かない。町にあるプールに泳ぎに行く。そういうことなんです。どうしてなんですかと聞いても校長先生もよくわからない。海へ泳ぎに行くのは家が漁師さんの子供たちぐらいかなと。あと泳ぎの上手な子供たちが行ってますね、とこういう返事でした。またある学校では夏休みになりますとキャンプをするそうなんですけれども、以前は海辺でキャンプをしていたそうなんですけれども、最近はおっぱら山山というか山のほうでするんだそうです。どうして海でしないんですかと聞きましたら、子供たちが海は体がベトベトするから嫌なんだと。そういうことで海辺のキャンプはやめたと、そういう話を伺いました。

私はこういう海岸の現場をみたり先生の話をついてるんなことを感じました。やはり伊勢湾再生を進めるのは非常に難しい事業であると。しかしながら大切な事業である、そういうふうを感じました。伊勢湾再生事業を進めるにあたってはもちろん科学的知見というんでしょうか、そういう知識を知ることは必要なんです。日常の生活の排水なんかによって環境への負荷を弱めるということも非常に大切なことだと思うんです。

しかしもう一つ重要なこと、最初に申し上げましたけれども、私たちは連携と協働でもってしなければ伊勢湾の再生はできないと申し上げましたけれども、やはりそれは今、現に環境活動等に取り組みされて

いる皆さん方、あるいはこれから活動に取り組みようとする皆さん、そういった我々大人たちだけの連携、協働だけでは足りない。やはり子供たちも含めて子供たちに伊勢湾の良さというのか、環境なり文化なり防災なりいろんな面の大切さというものを私たちは伝えていかなければならない。そういう責任が我々にはあるのではないか。そういうふうに私は強く感じました。伊勢湾再生ということで今日もシンポジウムを開催させていただいているんですけれども、今日ご出席の皆様方にはそれぞれ取組エリアというのがあるかと思えますけれども、このシンポジウムを機会にしまして皆様方の環境活動なりの最終形というのが伊勢湾の姿になって表れるということ、伊勢湾というものを強く意識していただきたい。私は強くそういうふうに思います。

私どもの知事はよくエクセレントガバメント、卓越した自治体、三重県を一流県にしたいと言っております。そこで私も伊勢湾を担当いたしましたしましてから、伊勢湾沿岸域とその流域、三重県だけではなくて他の地域、諸外国も含めましてですけれども、そういう沿岸域・流域圏が憧れる地域というんですか、あの伊勢湾沿岸域は良いなと、非常に良いなと、そういうふうに思われるような地域になればなと思っております。皆様方の取り組みの成果が伊勢湾の姿となって表れるんだと思っております。例えば伊勢湾の姿が環境という面でいえば悪くなれば、三重県はいったい何をやっているんだと。愛知県はいったい何をやっているんだと。岐阜県は何をやっているんだ。名古屋市は何をやっているんだ。そういうふうに批判をいただくのではないかと。逆に伊勢湾の姿が良くなれば、伊勢湾域の流域圏に住んでいる人たちの活動というのは素晴らしいな。環境を考えて素晴らしいことをやっているな。輝いているな。そういうふうな評価を受けるのではないかと

気がいたしております。これからは皆様方の現在の活動、その成果が伊勢湾に表れるということを強く意識していただきたい。そういうことを強く私は念じております。

今回シンポジウムに出席をお願いいたしましたパネリストの方々は、伊勢湾との係わりの深い方々でございます。特にコーディネーターをお願いしました野田先生におかれましては三重大大学の時代から伊勢湾に関わってこられまして、伊勢湾に造詣が大変深い方でございます。県もこれまでも貴重なアドバイスをいろいろと受けてきました。野田先生のお言葉を借りれば、伊勢湾を守るために我々のすべきことは山ほどあると、そういうことでございます。

伊勢湾再生に向けて今後も強いネットワークの構築を目指しまして、そういうことをみんなで考えながら協働というものはどういうものか、そういう仕組みというのはどういうものがあるのか、そういうことを考えながら再生を進められたらいいなと思います。どうもありがとうございました。

基調講演

司会

それでは早速、基調講演を始めさせていただきます。本日の基調講演は、南山大学総合政策学部教授、目崎茂和様より「日本の母胎・伊勢湾を生かす道は」と題しましてお話をいただきます。

目崎先生は東京教育大学大学院理学研究科をご卒業後、三重大学人文学部教授を務められ現在に至っておられます。

主な著書として「南島の地形」(沖縄出版)、「図説 風水学」(東京書籍)など多数の著書を出版されております。また、本県におきましては平成 12 年度に伊勢湾再生ビジョン策定調査報告書を作成いたしました。その策定委員会の座長もお努めいただきました。

それでは目崎先生、どうぞよろしくお願いたします。

目崎

ただ今ご紹介をいただきました南山大学の目崎でございます。この舞台に立つといつも思うことは、ついつい三重大学の目崎ですと言ってしまうんですけれども。2年前に今、紹介にもありましたけれども南山大学がちょうど万博が開かれる海上の森の脇に、新しい総合政策学部というのを作るというものですからお話をいただきました。じゃあ伊勢湾を遡ってまさに藤前干潟を通過して庄内川を上っていくと矢田川に入って、そこに行くと実は海上の森がつながっているんです。海上の森から藤前干潟、あるいは伊勢湾の沿岸、この川、特に庄内川はご存知の通り集中豪雨で3年前に新川が洪水を起こしまして、久しぶりに名古屋市が大変な水害にあったということで大きな話題にも

なった場所でございます。

私、1986年に三重大学の人文学部ができるということで三重に住み始めて、それまでは琉球大学の珊瑚礁の海で調査をしていたんですけども、ありがたいことに三重大学の人文学部ができるということで来ないかというような話を受けました。

三重大学に来てみたら、三重大学のキャンパスのすぐ裏がちょうど志登茂川という津の川の河口部にあたって、ちょうど大学が始まって桜が咲き終わるころになると、ちょうど4月に学生たちが入学して迎えると、志登茂川の河口は干潮になるたびごとにたくさんの市民の方が堤防に車を止めながら潮干狩りをしている姿に感動いたしました。これは使えるなというので、実は全国の国立大学とはいわず、全国の大学の中で唯一潮干狩り場がある大学というのは三重大学だなということに気がつきまして、それから5～6年してから毎年1年生の最初の授業は潮干狩りをやろうということにしました。どうしてなのかというと、これはただ大学でみんなで行って潮干狩りをやればよいということではなくて、ともかく大学にいながらびっくりしたことは、三重大学の学生は1年生に入ってくると3分の1は潮干狩りをしたことがないという学生がいた事実であります。ましてや浜辺で潮干狩りをした後にアサリとバカガイしか採れないんですけども、アサリを落とすときに生徒たちがそのアサリが一生懸命砂を掻き分けながら潜っていく姿にみんなで拍手して「うわっ、貝ってすごいんだ」という感動の声を聞いたことからこれはやらなければならないなということで、毎年100人から150人の一般教養の最初の三重に学ぶという授業だとかあるいは自然環境論の授業の中で、ただ潮干狩りをしてはいけないというので、全員に男の子と女の子を順番に手をつながせまして、

正方形を作るんです。ちょうど四角形を作っておくと決まった場所に四角形を作って、自分の手の範囲を約 20 分間掘ってどの貝がいくつとというようなことを毎年やっている、これはいい環境データになるんだなと。もちろんなかなか同時期というのはできないんですけども、一月や二月遅れてもそうやって海の自然に触れさせる。そうするとカニが何匹いたとかというようなことから、とにかく先ほどもお話がありましたけれども目の前に海があってもそこで貝が採れるんだとか、人たちが何をやっている、あるいは文科系の学生にはただそれだけではなくて、一番潮干狩りが上手い男の人やおばさん方を見つけて、その人が 2 時間の間にどういう動き方をして何処でどのくらい採ったのかという追跡型の調査をさせました。そういうようなことからなぜ我々は貝が採れないのか、何処へ行ったら貝が採れるのかといったようなことから、これは一種の調査にもなるし、伊勢湾の大きな環境問題にもなっていくのではないかとつながるのではないのかといったような思いでやったわけでありませう。

それと同時に今日、皆さんにぜひ考えていただきたい。今日は伊勢湾というテーマで、伊勢湾の環境問題だけではなくて、我々にとって実は日本人にとって伊勢湾って何だったんだろうか。これはたぶんおそらく考えてみると今からだいたい 1 万年ぐらい前、氷河期というか縄文時代が始まる頃から伊勢湾と日本人との関わり、実はそれまで伊勢湾というのはなかったんですね。ご存知のように 2 万年前に氷河時代がきますから、例えばニューヨークあたりまで氷河があった時代には、ここは全部海がひいていましたから、海がもっと外にあって、伊勢湾の誕生、三河湾の誕生はどう考えてもだいたい 1 万年ぐらい前に遡ればいいんですね。人と伊勢湾が結び付いたのは縄文人。もちろ

ん外洋には海がありましたからそれも伊勢の海とは、もちろんそのとき伊勢という名前がどうかは別としても、我々が今見ている伊勢湾の水深の真ん中の一番深い所には、1万年前あたりには木曾川とか木曾三川だろうが安濃川だろうが全ての川が合流して大河があつた真ん中をどーんと、それもだいたい神島と伊良湖岬の間、1万年前まではほとんどのこのへんまで海が下がっていましたから、これは全く空っぽだったということがよくわかっています。だからこの川も全部の川がちょうどこの狭い伊良湖と神島との間を流れていたということもほぼわかっています。

その意味では我々縄文人が、よく言うんですけれどもその後、何年前かは別としても伊勢神宮がどうしてここに置かれたのかも含めて考えてみると、私は日本の中で最も豊かな海がこの伊勢湾であったのであろうし、更にはお話とすればそこから魚が湧いてきて、あるいは貝が湧いてきて、そういうところが日本の真ん中にあるということでは、まさに日本の母胎ともいえる。それが今日までいろんな意味では、更に近代化されて工業化されても、日本の工業出荷額が一番の愛知県を含め三重県沿岸といったようなものが、自然ばかりではなくて工業生産も含めて生産額がやはり1位。名古屋港を含めて、車も含めてそういうところから海外に生産がされるということは、ここから日本の生産額が生まれていく海だということは、今日まで広い意味で伝わっているということが言えるのではないかというふうに思うわけです。その意味からすると単にここが今まで魚が湧いたり貝が採れたり、あるいは志摩半島も含めてこの伊勢湾というのが日本人にとってどのような思いでこれが語られてきたのであろうか。もちろん一番最初に書いてあるんですけれども、伊勢湾というよりも元々は伊

勢の海という形で出てきますけれども、これは我々が何気なく言う東海、東海地方の東海という言葉も伊勢湾がなかったら東海という言葉はそれほど現実味を帯びてこなかったと思います。まさに都があった奈良や京都から比べて最初の東の海という意味では、伊勢湾そのものが東海であったということがよくわかるわけであります。

そうやってきたときに、もしもこの海が先ほど言ったように一万年前みたいに干上がっていたら、これはまさに違った我々三重県にしても愛知県にしても違った世界が、そうやってきたときに結論的にいえば伊勢湾がなかったら多分伊勢神宮もここにはできなかつたろうし、多分熱田神宮もできなかつたろうというように思われてなりません。なぜかというとな日本の古い神社というのはよく考えてもらうと、実は出雲大社もそうなんですけれども、あと諏訪湖がなかったら諏訪の海がなかったら諏訪大社ができなかつたように、鹿島神宮もあそこに大きな港になるべき海がなかったらやはりおそらく古い神社はできなかつたんだらうというふうに思われてなりません。

そういうことから考えてみると日本神話の中でどのようにして伊勢神宮が語られてきたのか。そのことはご存知のように猿田彦神社を含めてサルタヒコとアメノウズメノミコトの話をご覧になるとわかるように、阿耶訶（アザカ）の海でサルタヒコさんが伊勢に戻ってきたあとに、阿耶訶の海で漁をしていたときに比良夫貝（ヒラブガイ）に噛まれて溺れ死ぬわけです。あちこちでサルタヒコさんの話をするとき、なぜサルタヒコさんがわざわざ九州の日向の高千穂の峰のところまで天孫降臨を迎えに行ったのか。なお且つ伊勢の五十鈴川のほとりまで戻ってきたのだろうか。もちろんこれは後に伊勢神宮をここに設置するための一つのプロローグといいましょうか、前座の話であろう

ということはわかるわけですが。それとサルタヒコさんはおそらく伊勢の阿耶訶の海で比良夫貝という貝に挟まれて溺れ死ぬわけです。なお且つ一緒に連れてきたアメノウズメノミコトはその後九州に戻るかどうかは別にしても、たくさんの魚を集めてみんな我々に従いなさい、天皇家に従いなさいよというようなメッセージを出すと同時に、そのときに面白い話がナマコが何も返事をしないものだからナマコの口を裂いたから今日みたいなナマコになったんだという説話が日本の神話の中に出てくるわけです。

伊勢の海、これからお話する伊勢湾というのがそういうように神話に描かれたり、あるいはその後、古事記や日本書紀に書かれた後に伊勢の海が出てくるのは万葉集です。万葉集の歌の中に出てくるものはたくさんあるのですが、その中に出てくるのはたいていは恋の歌なんです。伊勢の海というのは何か男と女、非常に女性が恋しいというような歌がたくさん出てまいります。たくさんといっても10首もいきませんが、そういうような何か愛を語る海だということがいわれますし、そういう視点から古代人が伊勢と海というのをどう捉えてきたのか。我々が伊勢湾を考えると、これから伊勢湾の自然について簡単に伊勢湾がどうしてできていったのかという話をするとき、先ほど海面が上がっていったというお話をしました。

伊勢湾がどうしてこのような形になったのかということも含めて考えてみると、大変面白いことに狭い意味の伊勢湾は南北に細長いのに、三河湾は東西に長細いというこの事実です。日本全体の湾の中というか日本全体の形を捉えてみると、実は面白いことに東のほうの湾というのはみんなこれ南北になっていて、狭い意味での伊勢湾は、西日本を捉えてみると有明も南北ですが瀬戸内海がこうやって東西にあ

る。実はこの瀬戸内海の延長が三河湾の東西性だということは地質学的には言われています。瀬戸内海が全体出たときに三河湾まで瀬戸内海があったのですけれども、それが南北の鈴鹿山脈ができる時代になって今度は南北性の、ということは日本の湾の中では東西性と南北性がちょうど交わるような十字の湾なんだということがいえます。このことはどうしてできたのかというと、実は山脈と関係があるということとはすぐわかると思います。日本の中の鈴鹿山脈がちょうど南北の山脈で、ここから東側の国は全部南北なんです。だから山脈と山脈との間に南北の湾ができるわけです。それに比べて瀬戸内海がどうして東西性なのかというと、ちょうど中国山地と紀伊山地から並ぶ四国のこういう山脈と山脈との低い部分が瀬戸内海ですので、日本列島は面白いことに東西の山並みと南北の山並みがちょうどこの伊勢で交わる。それが湾として交わるのが伊勢湾なんです。正に日本の山脈が十字に交わるということと、湾の形ができた、伊勢湾、三河湾が同時にできたというのが同じような形成だということとはすぐおわかりになっていただけるんじゃないかと思います。

このことは日本の文化を非常に大きく規定すると同時に、なぜ日本の母胎なのかということも簡単に。日本列島をどうやってイメージしたのだろうか、実は日本が日本列島を東北まで行かないと日本の体、古代は北海道までそんな意識はなかったんでしょうけれど、ともかく本州を含めて九州を含めて日本の神話に出てくるような世界では、正に伊勢がちょうどこういう形で南北の山脈と東西の山脈が伊勢に交わっていた。合わせて言えば、モデル的にいうとちょうど高千穂の日向、日に向かう、太陽が東から向かうという、東側に海がある世界。日向の国。ここにわざわざ高千穂に神話の世界を作ったと。ここにわざわざ

ざニギノミコトが高天原から下りてきたというのは、非常に意味があるわけですが、それをずっと山並を延長していくと、実は伊勢に行く。これより先には東は海だらけで、山がなくなるわけです。これより東側は全部こういうような東西ですので、その意味では何となく日本列島に模してみると、ちょうど伊勢湾というのは日本の母胎になるような位置にあるのではないかといったように、これはあくまで推察ですが、このことが実は伊勢神宮の成立といったようなものともしかしたら結び付くのではないのか。まさに日本の十字路の所に。

なぜこのような話をするかということ、皆さんご存知のように風水ですね。陰陽です。陰陽風水からやってくると、中国の一番の気脈といえますか龍脈といわれているのですが、ここからずっと脈が東のほうにずっと延びていって、延びた山脈に沿ってずっと延びていった龍脈が、真っすぐ延びていくとこれは非常に大きな話ですが、高千穂の峰にぶつかる。中国との境に白頭山という山があって、ここからの気の流れが南に下りてきたものが日本に渡ってくるとちょうどこれが高千穂にあたるのではないのか。大陸の両方の脈がということは、実は日本神話は朝鮮から渡ってきた人や中国から渡ってきた人たちの一つの大きな流れを象徴しているのであって、そこに象徴的に日向の気があって、ここから神武天皇がいよいよ東征に出かけるわけですね。この延長線上に実は伊勢があるわけですが、その前に大和で止まるのはこれはちょうど分水界になるんですけれど、面白いことに加賀の白山という名前は白頭山から由来する名前でありまして、この白頭山の南の流れを実は白山から南に流したところがちょうど伊勢にあたるということで、このモデルを南北が十字に交わる高千穂を伊勢に持って

くると、伊勢神宮がここに置かれるという話と結び付くのではないかというのが私はこれはあくまでも一つの仮説ですけれども。そういう意味で伊勢湾というのは正にここで神様が生まれる。東から太陽が上がるということの、東海を目指して日向の地から出かけたところの最後の終着点がまさに伊勢の土地である。そこには伊勢の海があったおかげで正に母胎となるような、女性にとってまさに子宮と同じような感性で古代人がもしかすると捉えたのではないのかということんでもない仮説を書いたところでございます。

そんなことよりも、でも古代人はおそらく伊勢神宮の海というのは正にそういう視点で全てが生み出されるような、そういうような世界として日本の中でそれも同時に東西がここで結び合う意味。東の海と正によく言われるように、伊勢神宮が造られるのは都から見て東国を統一するための一つの東に向かう前線基地であったとよく言われるけれども、そういうものを実は海の、サルタヒコとアメノウズメという神様によってこれを神話によって表現したのではないのかというように思うわけであります。

あまり誤解してもらおうと困るんですけども、伊勢湾の形を見ると全部人間の体からすると全ていいように捉えたとすると、伊良湖岬と伊勢湾というのはまさに子宮のように捉えられるのではないかという感じがするわけでありまして、古代人にとって何かこの海がこんなことを、衛星写真ですから古代人は衛星から見るように伊勢湾を捉えていたのかということ無理ですけど、しかしながら古代人は様々な国見をあちこちでやってきて、おそらく全体のいつも俯瞰をしながらやはりこの地域をどう経営していくのかというようなことを考えてきたのではないかというように思うわけであります。

伊勢湾の突端には、伊勢湾はご存知のように岐阜県から一部長野県まで含めていわゆる3県に跨る、あるいは長野県を含めまして4県に跨る広大な流域を持っているということ。ここに降った水がみんな流れてくる。鈴鹿山脈はここを境にして淀川に流れる筋と伊勢湾に流れる筋で、大きな意味で東西の日本の分水界になっているということはお存知だと思います。大きな湾のわりには大変浅くて、深くてもせいぜい40mいかないぐらいの所と、入り口が大変狭いものですから外洋と内湾との潮の出入というのが限られている。特に神島と伊良湖岬のところが大変急流の地帯にもなっているということがいえるわけです。ちょうど一番東の外れには神島ですけれども、潮騒で有名になった神島もありますし、海岸線を見ていくとちょうど宮川の河口の部分ですけれども古代の港は外側に向かって突堤ができるよりも、必ず砂州の内側の河口の中にほとんどの港ができていた。これは今から500年前に安濃津と呼ばれてここには日本三津の港もあったんですけれども、我々がその調査をしたときに一つは内側にあるということが重要なことなんです。この隣、伊勢の大湊なんですけれどもここも500年前の津波によって全部やられたり、あるいはこの間、江戸時代の安政のときの津波でやられたんですけれども、こういうような川から運ばれた砂州の内側にこういうふうに港ができるという。当然ながら伊勢湾というのは全体としての湾と、更に港としては江戸時代までは河口の中に港ができていたということがいえるわけなんです。

更にその港はというよりも、伊勢湾は東の海から太陽が上がる。特に元旦、ちょうど津の浜辺から河芸一帯になりますと初日の出の日、ここから見るとちょうど神島と伊良湖岬の間から海からきれいに太陽が上がる海なんです。伊勢からは残念ながら初日の出というのは海か

ら上がるというのではなくて、陸の上から上がるんですけれども、まさに津から見ると天照というのはウミテル、テンテルというのは後からなったんだろうというようにいわれるんですけれども、海が赤く輝くことによって天照という言葉がたぶん、もともと伊勢の言葉では、海神族が持っていた言葉が、このアマテルの時代は海から五穀豊穡なりと常世から様々な恵みがやってくるんだけれども、いわゆる高天原のように上から神様が降りてくる時代になると、上から照るというのでテンテルに変わったんだ。もともと民族的には天照というのは海からやってくるものが、それが今度は高天原の時代になってくると天から神様が下りてくるという降臨型の神話になったんだというようにいわれているわけです。

先ほどご説明したように伊勢神宮の位置というのは、その意味では正に伊勢湾の位置というのは伊勢神宮の重要なポイントになっていたし、出雲にしても常陸にしても日向の土地にしても、出雲の場合には夕日を眺めるという方向になるんだと思うんですけれど、必ず全部海と結び付く。その中で諏訪湖だけは湖と一緒にあって、いわゆる水辺と一緒にならない限り日本の神々というのは結び付いていないのではないのか。それが正に島国である大きな理由だろうと思うんです。

こういうような伊勢湾の特徴というものを文化史的、あるいは自然史的に眺めていったときに、あまりにも近代、その意味では近代化の中でご存知のように大阪湾や江戸の東京湾と比較してみるとよくわかるように、昭和60年代、それと同時にご存知のように今年年表を、これは県の再生委員会のときに作られた資料ですけれども、戦後の1950年から1999年までの横に比較ができるという意味で、世界中の流れから日本の環境に関する流れ、あるいは伊勢湾、三河湾がどういう形

で、それに対して行政上どのような対応が行われてきたのか。とりわけ後半の環境行政の対応もありますし、伊勢湾沿岸の対応もございますので、これは私がよく授業なんかで使わせてもらっているんですけども、それを付けさせていただきました。ただ、まだまだ水産関係なり何なりともっともっと書き込めば、このへんの細かいデータは更に海の博物館のところなんかでも収集していますし、三重県でも収集しているし。

これから更に関連をこういうところから見ていくと、やはり海の汚染といいたいでしょうか、それと同時に伊勢湾は日本が島国であるがために、四日市港の建設、あるいは名古屋港の建設というように江戸時代から干拓と埋め立ての歴史といったようなもの。それから臨海工業地帯。更には伊勢湾が我々にとって一番大きな環境面での話題というのは、まさに公害で臭い魚がたくさん出た 1960 年代ぐらいから臭い魚がたくさん四日市コンビナートを含めて公害の海になってしまったということが四日市喘息と共にまさに伊勢湾の湾央、奥の部分では日本の近代化を象徴するような公害の海に伊勢湾もなってしまったというように捉えることができるし、それによって伊勢湾というのが単に流通の港、あるいは交易の海というよりもどちらかというと我々から見捨てられたといっっては何ですけれど、一般の市民から大変遠ざかった。

よく言われることですがけれども、1959 年の伊勢湾台風や三重県にとっては台風 23 号の襲来によって、堤防が急遽、伊勢湾台風以後伊勢湾沿岸に非常に急速にといっっては何ですけれど、ほとんど伊勢湾台風対策後、急遽堤防が全てにわたって建設されることによって、村から浜辺に行く道沿いがある意味では寸断されたうえで、我々市民からというよりも我々の住民から海が遠ざけられた時代がやってきたのではな

いのか。それは私ども三重大学にいても感じることでありまして、潮干狩りや浜辺に出るためには高い堤防道路を越えて行かなければならない。そうすると大学もそうだったと思うんですけども、大学でたまたま昼ご飯を食べに浜辺まで行くというよりも、大学の中で食堂で食事を済ませてしまう。気持ちがいいから海に出かけるなんていうことはなかなか避けられてしまった。

その意味からすると近代化は同時に我々から海との道、あるいは海水浴場、潮干狩り場がたくさんあったにもかかわらず、私たちの経験からいうと 1986 年家族とともに沖縄からやってきたときに、私は白塚に住んでいますから一番近いというと鼓ヶ浦の海水浴場に家族で出かけました。子供たちが最初に何を言ったのかというと足が見えないと言うんです。沖縄の海で子供たちは泳いでいましたから海は透き通っているものだと。泳いでいても足が、立ったところで足が見えるのが当たり前なのに、海水浴場なのになんで足が見えないんだという言葉が、今でも私にとっては大変衝撃的に残った言葉であって、それが実は伊勢の海なんだ。現実的には志摩半島の御座や白浜の海に行ってもそんなに沖縄ほど透明度があるわけではない。もちろんこれは外洋から絶えずきれいな海水が流入しているという世界ではなくて、極めて伊勢湾は閉鎖的で一度汚してしまうと、あるいは一度富栄養化というのが始まりますと、それによってなかなか自然に戻るという更新する時間が大変長くかかるという閉鎖的な海であるということを感じ取るわけであります。

そんなことから伊勢湾というものをどうやってその時代からどこまで再生するかは別としても、伊勢湾の海をどういう形で守らなければならないのか。よく言われることですがけれども名古屋港から、木曾三

川から三重県の場合にはずっとこの海岸線をたどっていくと、津まで出てきませんけれども鈴鹿川の上流から北の部分というのは、ほとんどギザギザのようにもう埋め立てによって60年代を含めて、それと同時に今度常滑沖のこのところにこういう形で、先月も我々見てきたんですけれども、中部新空港ができるわけです。

そういう意味からすると、ともかく現在の段階でも鈴鹿川と常滑を結んだラインまでというのはもう東京湾や大阪湾と同じような、もうこれ以上埋め立てができない。先ほどお話に出てきた藤前干潟はこの部分になるんだろうと思うんですけれども、正に日本の近代化というのは臨海工業地帯の中で阪神、あるいは京葉を含めこの中京工業地帯が、日本の工業地帯が全部大きな湾を全部埋め立てた所に、もちろんディズニーランドにしてもUSJにしても全部日本の新しいものをやるとなると全部湾を埋め立てるんですね。

しかしながら伊勢湾だけは今お話したように空港ができて鈴鹿川と常滑までより南の部分に関していえばまだまだ埋め立ての余地があるというよりも、自然のままこういう形で津の日本鋼管のところを除けばまだまだ十分に、全くの自然の浜辺ということではないんですけれども、海岸部に関していうと半自然型の海岸がまだ広く残っているという点では三重県というのが、愛知県の海岸線、あるいは三河湾もかなりの部分がもっと浅くて埋め立てられているわけですから、干潟は一部残っているにしても大きくこれから環境の保全というような視点に立ったときに、三重県サイドが非常に大きく海と関わっていかなければならない。

このことは長い目で見れば、合わせていけばずっと三重県が伊勢湾を水産業の面から見ても、あるいは海の関わりという点から見ても歴

史的に愛知県の海ではなくて、やはり三重県が主体的に、どういう形でこれを再生していくのか。あるいはしっかりした保護の管理をしていくのかということが求められているわけです。そういうことから見たときに、三重県の住民といいますか三重県の市民そのものが伊勢湾にどの程度の関心を持ち続けるのか、あるいはどの程度というよりもどういう形で絶えず伊勢湾と触れ合っていくのかという活動なしには、伊勢湾がどうのこうのと、特に私が中部新空港だとかあちこちでダイビングをして、建設のときも潜らせてもらいました。神島の沖の鯛の島で潜ってちょうど今頃、今頃しか伊勢湾は潜っても透明度は1mありませんから。びっくりしたのは常滑沖で建設が最初に始まったときに潜ったときなんかは1mないものですから、下まではまったく味噌汁の中を泳いでいるみたいなものです。潜っていくと、底に着くと貝殻とほとんど死んだ貝ばかりごろごろあって岩があって、何かを探るなんていっても写真を撮るなんていってもプランクトンが多くて濁りが多いから、写真を撮ったって1m先まで見えません。フラッシュをたくと乱反射してしまっただけで全然相手の顔もろくに見えないというような条件なんです。神島沖の鯛の島で今頃以外には鯛の島の調査というのは透明度が一番いいのは今頃なものですから、この4年ぐらい前まで毎年この冬場潜っていたんですけども、ここだと条件のいいときには20m、30mずっと見通せます。これはもちろん外洋のきれいな水が流れ込んでいるということですけども、それがほとんど湾内に入ってこないということでありまして、この海を新たな意味でどのようにして再生していくのか、あるいはきれいな海に戻すのか。ただきれいだけでなく、きれいにするためにどういう形で浜辺を取り返すのか。あるいは浄化作用だといわれているように藤前干潟が残ったよ

うに、干潟の海水を浄化する、有機物を全部吸い取ってくれる干潟を
どのような形で残していくのか。あるいは魚を残すには、飛行場
問題のときに議論されたように藻場を、魚のゆりかごと呼ばれている
藻場をどれほど伊勢湾の中に残していくのかといったような、具体的
な海の問題を解決していくのではないのかというように思うわけです。

そこで今日のプリントの3番めのところに伊勢湾の環境問題、近代
化の中でどういう形で、いわゆる Wetland としての伊勢湾を守ってい
くのかという総合的な対策が必要ですし、何年か前に三河の漁業組合
が提案したように赤潮や青潮といったような問題だけではなくて、数
年前に特に伊勢湾でたくさん捕られていた寿司ネタである巻貝のバイ
貝ですね。バイ貝がほとんど絶滅した。巻貝が絶滅したというニュー
スが飛び出したときにおそらく環境ホルモンだろうと。目に見えない
形で環境ホルモンによって伊勢湾の貝が成長できないような段階にな
ってしまったのではないかというように思われるわけでありませう。で
すから新たに赤潮だ、青潮だ、あるいは貧酸素でまったく底生の生物
たちが生き絶え絶えだという状態に加えて、なお且つ環境ホルモンの
問題といったようなものが伊勢湾で。このことは我々寿司ネタといっ
ては何ですけれど、江戸前があるように伊勢前の浜から取れる魚介類
がまさに我々にとって農業であるところの地産地消といえ、まさに
前物の寿司を我々がいつまでも食べられる状態になる。なってもらい
たい。もちろん汚くても穴子のようなものは泥の海のほうが油分があ
って砂の所よりも美味しいということもありますけれども、でもとも
かくいつまでもここの赤貝だとか、ハマグリのようなものはほとんど
食べられませんけれど、我々が行っても取れませんけれども、何とか
やはり美味しい赤貝、それとか多くの魚介類が食べられることがどう

したらいいのかということも含めて、食通といっちは何ですけれども、寿司ネタが大事なこと、あるいは私は世界中を周っていて最近一番日本文化が世界中で、もちろん車や電化製品だけではなくて、文化という点で明らかに世界中が今、寿司屋ブームと言ってはなんですけれど、どこに行っても、どこの大きな町に行っても、どこの大きな都市に行っても、砂漠は別として都会という日本と日本の寿司屋というのがこの10年ほぼ常識になりつつある。あちこち回って、なんとかその調査もしたいなと思っているんですけれど、そんな思いから、やはり伊勢湾のところの大きな寿司。

更に3番に海を守るためには海の頂点にいるアイドルの生物が必要です。例えば伊勢湾でいうと何なのかというと海亀かスナメリですよ。三河湾では今、土曜日と日曜日にスナメリツアーが出るようになりました。2千円ぐらいで2時間回って、スナメリはほとんど見つからないといっていますけれど、ホームページで紹介をしています。それとかこの白塚も含めてこの辺の浜まで毎年様々な人が調査していますけれど、海亀が産卵しにやってくるのかどうか。

今から2年半前になりますけれども、名古屋港にシャチが現れたところちょうど名古屋港水族館はシャチの水槽を建設中だったんですけれども、結局名古屋港水族館はみんなでシャチを逃がしたんですけれども、去年、一昨年、ロシアと協力して2~3億円使ってシャチの捕獲にいったんですけれども、結局、失敗して水族館の中にシャチを入れられない状態が続いているんです。それについて市民側からすると税金の無駄遣いではないのか。しかし、名古屋港水族館としては金のしゃちほこではないんですけれど、とにかくシャチを入れられないことには面子が立たないということで一生懸命ロシア側と交渉していますけ

れども、そういう水族館で見られるだけではなくて、現実には我々がイルカやスナメリやあるいは海亀とこういうところが今でもいるんだということを認識することによって、伊勢湾の大切さというものを見つける必要があります。

このことは絶滅危惧種の問題と関わるわけですがけれども、海上の森が守られた大きな要因というのは、オオタカの巣が見つかったということでありまして、環境問題の中で頂点となるべき生き物たちがそこでまだ生き延びられるかどうかということが大変重要な要素であります。スナメリが観光ツアーになるかは別としても、我々にとってかつての自然とまだまだ共生できるときに、こういうアイドル型生物といっているんですけれどもあまりよくないですけれども、大型の哺乳動物のようなものが非常に重要なことだろうと思います。

4番目になりますけれども、我々島国にあって今までゴミでも下水でも何でも海に流せば、川に流せば、水に流せばという、雨が多かったから全て水に流す思想というものが我々日本人には染み付いていた。結局のところ伊勢湾に全部皺寄せがきたのが近代だろうというように思います。海に流す、ましてや伊勢湾といったようなものが閉鎖性の、まさに湖と同じような役割をしているという点では琵琶湖を守るという運動と、伊勢湾を守るというのと、琵琶湖のような所は滋賀県1県で持っていますから、それと同時に、あそこ全体がラムサール条約の締結の地になるわけですがけれども、伊勢湾というものを守るということになると、これは単に三重県だけではなくて多く岐阜県や愛知県と協力を結ぶ。それと同時に、日本3大都市圏を囲んでいるという形では瀬戸内海と同じように、連合体でいえば日本政府そのものが大きくこれに関与するような体制がない限り、これを守ることはできないと

いうように思っているわけです。

その中で三重県というのは私は江戸時代だけではなくて古代から先ほどのお話ではないけれど、伊勢神宮ができたということも海の利益というか、神様に奉納するものもアワビから始まって伊勢海老から始まって全て日本の水産大国、日本の食文化のグルメ大国を作ったのはやはり伊勢と志摩の海が。伊勢湾と志摩と同時に、磯の海と浜の海を同時に持っていたからこそ、これが日本の中心的なグルメ大国の、三重県の水産、このことがあったからこそ御木本幸吉のような、私は日本最初の明治時代のベンチャービジネスの第1号は御木本幸吉だと思っているんですけども、なぜかというと日本の女性たちに装身具、ブローチだとかネックレスだとか西洋のものを全部日本の女性たちに、格好いいことに明治天皇に対しては世界の女性の首を真珠でしめさせてみせようとか、太平洋戦争に負けたときにどれほどかかるかわからないけれど、その賠償金は俺が払うなんて本当かどうかわからないけれども、そういう日本の最初のベンチャービジネス、まさに御木本幸吉が生まれたというのもこの伊勢の、あるいは鳥羽のこういう海の中で海外にも目を向けて、彼が若いときに横浜に行って真珠のかけらが非常に高価な値段で海外に売られたり、そういうことを目の当たりに見たときに、それと同時に彼がなぜ海外に目を向けたのかと、大変面白い話は、彼は学校を出てからうどん屋の息子として卵売りの行商をしていたときに、たまたまイギリス船が日本の海図作りのためにシルバー号というのが鳥羽の港に入るんです。彼は言葉もできないのに船で乗り付けて、卵を売りつけるときに足技でやったというんです。外国人に対して自分で卵を売り込んだ。こういうときに若い経験があるということ、それと同時にそのときの海図作りのトップは誰だったか

というと、藤堂藩の津の出身であった柳権悦（やなぎ ならよし）という日本で最初に海図を作った男が、面白い話は晩年になって権悦は日本水産界の会長になるんですけども、柳権悦というのはご存知のように日本の民芸運動を始めた柳宗悦（やなぎ むねよし）のお父さんです。彼が海軍少将になって伊勢を回って日本の水産が大事だということを回ったときに、御木本幸吉は彼の講演会にあちこちに出歩いて必ず講演会の前に、御木本幸吉様お知り合いの方が前に待っていますのでというのをただでアナウンスさせた。これを権悦は聞いていましたから、最初に面会に行ったときに「お前が御木本君なのか」ということですぐ面識を得た。そこから彼が真珠養殖場を地元から借り上げるときに困ったときに柳の力添えであるその養殖場がスタートするわけです。これも日本で最初に海図を作ったのはこの浜辺で測量していた柳権悦であったということ。あるいはそういうような海とのつながりの中で、もしもどこか一つでも欠けていたら私は伊勢の海からというよりも、鳥羽から世界最初の養殖真珠というのは生まれなかったのではないのか。もちろん東大の先生を紹介したのも柳の力であります。

という具合に更にいえば江戸時代で例えば南島町出身の河村瑞賢が日本中の港のネットワークを完成させる。日本の物流大動脈は実は三重県の力。その名残として残っているのは、鳥羽に代表的に残っている日和山です。全国に80ヶ所ぐらいに日和山というのがあるけれど、これも伊勢湾の入り口にあった。ということは鳥羽の港というのは少なくとも江戸時代までは伊勢湾からやってくる、木曾のご用材も全部そうなんですけれども、ご用材もやってくる北からの流れと、大阪と江戸との間を結ぶ大動脈のちょうど日本の真ん中であった。

このことがすごく大事なことは、ご存知のようにここに一度停泊しないと、ここから下田の港に行くまでずっと御前崎まで砂浜ですから、途中で波が変わったり何かするとすぐに難破するから、とにかく必ず的矢とここには停泊をしていた。特に江戸に向かうときにはずっと砂浜ですから、天然の良港が下田の港まではないわけです。その意味では新幹線でいえば名古屋以上の必ず物流の日本最大の中心地であった。そのために毎日、日和山に登って眺めるわけです。漁師たちがその予測をして「さあ、出かけよう」というのでここから出かけるわけであります。

まさに伊勢湾そのものというのは日本の水産王国、あるいは物流王国、あるいは藤堂高虎というこの津藩の埋め立て上手といいましょうか、水辺の湿地帯を、海岸縁の湿地帯のところでお城を造る。安濃衆を引き連れたトップが徳川家康の右腕となって東京湾の有楽町一帯の海辺の湿地帯を全部埋めて掘割りを造るわけです。となるとちょうど江戸時代に始まる全国ネットワークの物流にしても、湿地帯の城下町造りにしても、あるいは近代になって御木本幸吉を生むにいたっても、あるいは伊勢商人がみんな行って水産物を含めて全てのものが伊勢湾を通して様々な形で運ばれるというように、日本の基といっちは何ですけれども、そういうものが伊勢の海から江戸時代は誕生したんだらうというように考えますと、我々にとって伊勢湾というのは日本人にとって近代を産むきっかけでもあるし、近代そのものも伊勢湾によって支えられてきた。

このことはその後伊勢参宮を含め、伊勢神宮にお参りするということだけではなく、さまざまな意味でここは大変な交流の海であったということが言えると思います。河村瑞賢がどうしてトップになれたのかと、

面白いなと、伊勢の商人でいたときに、実は江戸で大火事があったときに彼は一目散に木曾に行って材木を全部買い付けるんです。なぜ彼が買い付けられたのかというと、あれは木曾川を流して熱田にやってきて、そこから伊勢を通して運べるようなルートがちゃんと伊勢商人の中を含めて、伊勢湾を通して全部木曾の山奥のご用材から江戸まで結ぶルートをちゃんと確保していたからなんです。それで彼が大金持ちになるというわけではないですけど、それが大商人になるきっかけになるわけです。

それだからこそ、彼は今度は日本海側の酒田、あるいは仙台の阿武隈から、港から御用米を運ばされる役割を持って全国にネットワークが、いわゆる東回り、西回りの樽前船の港造りを完成させるということになるわけでありませう。

そういう物流を含め、伊勢の海というのが結果的に今、日本が国際化したときに、ここから自動車や運ばれ、あるいはここから寿司ネタが運ばれるということではないんですけど、今我々の海というのは決して日本の海ではありません。これが全部世界につながっているわけでありまして、そういう視点から決して我々日本のために伊勢湾を守るということよりも、よくいうように地球温暖化の中で、例えば森が大切だ、だけど世界中の聖地の中でイスラム教やキリスト教やあちこち行ってもらおうとわかるように、教会だとか宗教聖地の中に森を持っているというのは日本だけで、伊勢神宮がその中心にあるということとはご存知ですよね。森がない神社や教会、実は日本だけなんです。近代的な国家の中では。そういうことから伊勢湾のあり方というのは同時に森も含めて我々が今持っている森を含めて、山と森と川そういったようなものを、まさに地球温暖化の時代に伊勢湾を通して世界に

訴える。その意味ではよくモデルとしてチェサピーク湾だとか、世界中のこういうような閉鎖域のモデルというのがあるわけですがけれども、我々から世界にこういうような近代化された人口が何百万もあるような、何千万近くあるような海をこれからどのようにして 22 世紀に向かって管理していくのかという体制を私はぜひ作るべきだと思います。

その点では三重県から伊勢湾のデータベースなり、あるいは市民みんなが連携をして、この伊勢湾を見守りつつどのように活用してどのようにこれから我々子孫に伊勢湾の素晴らしさを文化と共に、ということは我々の生活を通して日本人の意識と共に海のあり方、あるいは海の食のあり方、あるいは健康とかそういう問題も全て通して私は伊勢を日本のパッケージとして、世界のモデルとして打ち立てる。そのときに伊勢神宮をお参りしないようだと地球環境の温暖化の問題はわからないというのと同時に、伊勢湾、中部新空港から伊勢の海を通ってもらうことによって日本のあり方といったようなものを考えるような、ネットワーク型の人づくりなり国づくりといったようなものが伊勢から始まることを、伊勢湾から始まることを日本の母胎として大きな声で提案するような方向で私は進めていきたいなというふうに考えているわけです。この後具体的な問題についてパネルディスカッションなりさまざまなお話をさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

司会

目崎先生、大変貴重なお話をありがとうございました。私たちのかけがえのない伊勢湾を改めて見つめ直す機会を与えていただきました。誠にありがとうございました。

パネルディスカッション

司会

それではただ今よりパネルディスカッションを始めさせていただきます。パネリスト、並びにコーディネーターの皆様のご紹介を申し上げます。皆様からご覧になりまして舞台左からTSU・アイリス代表 柏木はるみさんです。続きまして緑のネットワークみえ・自然環境創造協会理事長 久米宏毅さんです。お隣は三重県漁業協同組合連合会 指導部長 畑井育男さんです。最後になりましたが先ほど基調講演をいただきました目崎茂和先生です。なお本日コーディネーターを務めていただきますのは野田宏之 三重県総合企画局特別顧問でございます。それではよろしくお願いいたします。

野田

それではパネルディスカッションに入らせていただきます。まず冒頭に今日のシンポジウムの題は「私たちの大切な海・伊勢湾 連携と協働」というテーマをいただいております。

パネリストの皆様には現在何をなさっていらっしゃるかということを中心として、とりわけ伊勢湾との関わりを中心にお話をいただきますよう。

柏木

皆様方のお手元のプログラムにTSU・アイリス代表 柏木はるみと書いていただいておりますが、TSU・アイリスという会は環境問題を考えるという目的でできている任意団体ではないんです。何を考

える会かといいますと、女性問題を考えていこうということが発足の契機で、平成元年に発足した会なんです。

その女性問題というのは皆さんご存知かと思いますが、男女共同参画社会を21世紀は実現していこうとか、男らしく女らしくではなくて自分らしく生きられる社会をつくっていかないといけないね、人権を大事にしていきたいねというようなことを考えていこう、そしてできることを行動していこうと思ってスタートした会なんです。それがなぜ環境の問題のこのような場に来ているのかといいますと、そういうことが契機で発足したんですが、平成元年7月に発足しましたが、それと同時に同じ年の12月から津の阿漕浦海岸の清掃活動を始めるということをしてしまったために今ここにいるというか、今ここにいられる状況にあります。

今日は男女共同参画の話をするわけではないんですが、男も女も性別にかかわりはなくですが、男も女も老若男女、どんな状況にある人でも自分の住んでいる町で気持ちよくその人らしく住んでいきたいねということで活動がだんだん広がっていったということになっています。今、阿漕浦海岸の清掃活動などを行っているんですけども、今私たちの活動の精神的なバックボーンでもあり、活動のフィールドでもあり、とても重要な柱になっています。ですから一方で男女共同参画、一方で環境問題を考えつつ清掃活動をしているということで、二本立てで今、大きな活動をしています。

具体的にいいますと、実は阿漕浦海岸に私どものメンバーが、津に住んでいる者が多かったものですから阿漕浦海岸に出かけてみたんです。津市の津というのは港ですから、目崎先生のお話にもありましたように津の港というのは津の発生の地でもありましたし、そこに行っ

て何か見えてくるものがあるかなと何気なく行ってみたんです。そうしましたらその当時ご記憶にあるかどうかわかりませんが海岸が大変汚れていて、私の目から見たらほとんど放置されているような状況、ゴミだらけ、滅多に人の来ることもない、ここからでも本当にわずかなところで近いところで、町の中心地と港が本当に近い、私は東京のほうから来ましたが東京では考えられないようなロケーションにある場所なんです、ほとんど知らない、行ったこともない、津の花火なんてほとんど見に行ったことがない、子供の頃に行ったきりだというような市民の方も多かったんです。その当時暴走族が堤防の上を走り回っているとか、シンナーを吸う子供たちがそこでシンナーを吸ってシンナーの袋がいっぱいあるというような状況の海岸を見ました。この海岸は市民にとってどういう海岸なんだろうと、やはり考えました。その子供たちの人権やその子供たちがなぜこんなところに来るんだろう。なぜ津の市民ばかりではないですが、こんなに海岸が汚れてしまっているのに気にならないのか。あるいはそのことに関心が向かないのか。いろんな観点でまず環境ありきでスタートしたわけではないんですが、生き方、その町の文化、自然とか環境とか人とかのつながりの中で海岸に立つようになりまして。それからあまり汚かったものですから箒を持ってお掃除を始めました。最初は週に一度ずつやっていたんです。やってもやってもきれいになりませんでした。今は随分と協働とかいろんなことも言われましたし、言えるようになってきましたし、環境問題に関心を寄せる人も多くなってきましたので随分ときれいになりましたが、その頃はやってもやってもきれいになりませんでした。先ほどお話があったように、掃除して、また次の週に行ってみるともっと汚れているみたいなことがあって、腹が立つし何で私た

ちがこんなことをやっているだろうとみんなでブーブー文句ばかり言いながらやっていたんですが、でも止められずにもうちょっと頑張ろう、もうちょっと頑張ろうということで掃除をしたり夢を膨らませてきたりしました。

最初は掃除だったんですが、思い返してみますと随分といろいろなことを海でもしてきました。例えばサンドアウトとってみんなで市民に関心を持ってもらうために大人と子供と一緒に砂遊びをするということをしたり、海岸に美杉のほうの杉の材木屋さんと協力をして材木を安く手に入れて、そこに30基ほどの丸太を半分に切ったようなベンチを置いて海岸に来てもらいたいと思ったり、いろんなグループとの活動と連携をして協力をしてそこでいろんな活動をしてきました。今、あげることができないのでまた思い出したらあげますけれども、実際ハード面でもいろんなことをしましたし、その中で行政の窓口を訪ねることも多くなりまして、津市とか県とかいろんなところの行政の方々と会ったり話し合いをしたり会議に参加をさせていただいたり、あるいは行政がするいろんなイベントに積極的に参加をしたりというふうなこともして協働関係、人間関係を作ってきました。

やってきたことといえば本当に僅かかもしれないんですけども、思いはやはり津の海をきれいにしたいというのではなくて、私たちが気持ちよく住みたいが基本であったし、21世紀は、女性の問題、人権の問題、同時に環境の世紀でもあって、同時に考えていかなければいけなかった問題なんだなと思っています。

そこで得たことはたくさんあります。今は精神的なバックボーンになっていて自分たちの活動が疲れるとそこに行って自分たち自身が癒されたり、今そこに私たち花壇を作りました。ささやかな花壇なんで

すが、アイリスの花を植えたり、ポーチュラカを植えたり、パンジーを植えたりということで、植え替えに行ったり草抜きに行ったりということもしながら、会員になりたいんだけどもまだまだ市民活動とか人間関係が苦手だという方には、そこにまず来てもらって活動していただく。そして会に馴染んでいただいて会員になっていただくというステップの場になっていたりしています。

実はアイリスは海岸活動の他にいろんなことをやっています。ですから私たちの会、何屋さんなのか何をアイリスでやっているのとよく言われてしまうんですけども、何でもやっています。コンビニエンスストアですと言っています。人間が生きていくということは24時間ですし、縦割りでもやっていけないわけですね。ありとあらゆる問題が私に関わってくるわけです。会員に関わってきます。環境だけ考えていたら生きやすくなるわけではないですし、人権だけ考えたらいいわけではないし、子供のことも家族のことも教育のことも全てが生きていくうえで大事なことなものですから、いろんなことに関心が向いていきますし、やっています。縦割りではとてもやっていけない、総合学習、あるいはコンビニエンスストア的な活動をしています、かなり深く勉強もさせてもらってきていますが、広くもやっています。

海岸についていえば、例えば海岸に関心を寄せるきっかけになったのは、海岸に立って掃除をするけれどもちっともきれいにならないし、ここはなんなんだろう、そんな必要がないのではないかとかいろいろ悩んだときには、私どもの会員は図々しいですから目崎先生に「先生すいません、阿漕浦海岸の話をお聞かせください」といきなり電話をして、実は阿漕浦には阿漕平治会館というのがあるんですが、そこに来ていただいて「すいません、阿漕浦の歴史を話して欲しいんです」

なんていうことでお話をいただいて、やはり大事なんだと、エンパワーメントされたり、エネルギーを湧かされたりして活動を続けてきました。例えばそれから派生して三重県下 13 市の環境ゴミ収集の現状を調べるための調査活動をしたり、海岸に来る人はどういう意識でこの海岸に来てくれるのか、何処からどういう人が来るのかというような調査をしたりとか、阿漕浦を子供たちにわかりやすく説明するために畳 2 畳分ぐらいの大きな箱庭を作って展示をしたり、実にさまざまなことをやってきました。でもそれもみんな面白かったですね。

いろんなやったことを話してきましたけれども今後の課題というのも考えていますので、そのあたりはまた後ほどお話させていただこうと思います。とりあえず第 1 回目ということで終了いたします。

野田

ありがとうございました。それでは次に久米さんお願いいたします。

久米

私はまちづくり、または環境という視点から伊勢湾に関わってきたところでございます。

今、ご紹介いただいておりますのは、緑のネットワークみえ・自然環境創造協会の理事長というふうにご紹介いただいておりますが、一方で過去 9 年ぐらい前から阿漕浦海岸におきまして N P O 法人ボランティア活動を進めてまいりました。動機となりましたのは阿漕浦海岸に流れ着いてくる物の質が問題。つまり人工的な物の流入が多いということが一つありますし、海岸が浜辺というよりは単なる陸地の荒地のような形になってきている。海浜植物はもともとあったんですけれ

ども、そういうものが非常に負けていってしまして、新たに陸地のセイタカアワダチソウなりギシギシなりが非常に繁茂してきている。このままいきますと海岸というよりは荒地になるのではないかなというような危機感がございました。

私は阿漕浦海岸の近くで生まれましたから子供の頃の情景もそれなりに脳裏にはあるわけですがけれども、いわゆる過去の郷愁というよりはこのまま放置していけば津の町といいますか海浜の環境が非常に荒れてくるだろうということを懸念いたしまして、近隣の人々に呼びかけさせていただいてボランティアの手によってやれることをやってみようではないかということで始めたわけですが、ただ当時は、まだ9年ほど前はボランティアとかNPOとかいう言葉が、あるいはそういう活動がそれほど盛んではなかった時代でございましたので、当時の手法としましては例えば署名でも集めて議員さんを先頭にして行政のところに行って何とかしろというようなことを言うのも一つの形ではあったかとは思いますが、地域の方々に呼びかけさせていただいて集まってきていただいた方々の声はいきなりごちゃごちゃ言っていないでさっさとやろうという話がありまして、すぐに行動に移って行って一つの形を作っていました。

そのときにいろいろ意見がなかったわけではございません。非常に問題なのは取り組んでしまったらこんな草が多いところや、何か永続的にやらなければいけない、そういうことを非常に億劫に感じる部分もありましたけれども、少なくとも1回でも2回でも草を刈って花でも植える、あるいは松でも植えれば少しはよくなるだろう、今よりはましだろうと、どうせ行政がしてくれないししてないんだから我々の手です。基本的には海というのは皆さんのものですから、我々のも

のですから、我々がそれなりに手を加えていくという、活動していくということも当然のことではないかというような視点もございました。

それから活動を始めて一つの障害にあたったのは、いわゆるボランティアですから当然無料で働くわけですけれども、いろんな経費がかかってきます。お金がかかりますからそれを皆さんで供出していかなければならない。働くのはいいけれど金まで出すのかというのが一つのハードルでして、やはり我々がそれなりに市民のサイドから何らかのことを催していくのには、働くこともいるし、お金もかかるということについてのいろんなハードルがございますから、それを越えていくということが大事であったというふうに思っています。

その活動の中で重視してきたことと申しますのは、今も話させてもらったように議論しているよりは行動を進めていくということが先でして、机の上でこれが自然保護か、海岸のあり方かなんてやっていますと結構そこで意見が違ったりする傾向があります。例えばヤシの木を植えたほうがいいのではないのかとか、あるいは松にしようとか机上でしゃべりあっているわけですけれども、そういうことを重ねていましてほとんど何も新しいものは生まれてこない。下手をするとその段階でもう分裂していたりする傾向がありますけれども、やはり現場に立ちまして仕事の中で考えていけば、ここはこういう木がいい、あるいはこういう作業の仕方がいいというようなことがほとんどの形で合意ができていく。そういう点では現場に立つということは非常に大事だし、行動として問題のありかを解決していくということに心掛けてきまして、それはそれで一定の成果があったかなというふうに思っています。

実際に活動しますと成果が見えてこなければいけません。それは一

隅を照らすとか縁の下の力持ちということは一つの立派なことではありますが、やはり目に見えて成果が出てこなければ今日1日何をしたのか、あるいはこの1ヶ月何をしていたのかよくわからないようなことではダメでして、成果を目の前に見せていくということが大事だというふうに思ってきました。それはまたリーダーとなる者が、たとえ誰の目にも見えるほどの成果が出ないとしても、こういう意義があったということを常に活動してくれている皆さんに返していくということが非常に大事なことではなかろうかというふうに思っております。

それから活動は基本的には世間を開けていなければならないのであって、我々の団体だけがやっているんだとか、お前は違うメンバーではないかとか、そういう話では事は全然進まないの、誰でもよろしいということですね。実際現場に行きますと、見慣れない方がスコップを持って何か作業をされている。「あれ、誰や」とかというような話をしていますけれども、結局はそれでいいわけで、集まってこられる方がその場の働き手でもありボランティアであると。またメンバーとして一応作らせてもらってきたけれども、そのメンバーの人がたとえ来られなくてもそれはそれで十分役を果たしているわけですので、単なる仕事で「この頃あいつ来んな」みたいな話を問題にしてそれを重要な課題として考えるようでは、やはりこういう無償でしかもお金も出して活動していくというものは実ってこないだろうというふうに思います。

そういうものの総体といいますか総括みたいなものですが、考え方としてはプラス思考。よくいわれるようにそれでいかないと活動のマイナス点、あるいは個々のメンバーのマイナス点、それから状況のマイナス点なんかを語り合っている、いわば行政のマイナス点など

も語ったりはしますけれども、そういうことを重大事しながらしゃべっているとだんだん自分たちの値打ちも下がってくるという気がします。そういう点では良さ、それぞれのメンバーの良さ、自分たちの活動のそれなりの良さ、そういうものを重視しながら前向きにプラス思考で取り組んでいく。

そしてもう一つは活動していく中では組織というものも非常に重要になってきます。組織を作っていく問題はかつては多くやりました。私もいろんなことをやったことがあります。まず会則を作って、会則の下に組織を作ろうとする傾向がありますが、やはり野に出てボランティア的な活動は行動をしていく中で行動に見合った組織、あるいは約束事を決めていき、決めていく中でそれを守ると今度は新しい行動が生まれるという形で活動しながら作る、あるいは作りながら活動していくということ、そしてある一定の段階がくればそれなりの組織として確立するだろうというふうに思います。

今、大事なものは伊勢湾についてもいろんな環境についてもそうですが、語り合っている段階からもう実際の活動に入っていかなければならない段階だと私は思っていますので、今申し上げたようなことなどもご参考にさせていただければありがたい。それと海で活動しておりますとどうしても陸地の問題が問題になってくる。流れてくる物にしましても遠くは長野県からも流れてまいりますし、水質の問題にすればそれぞれ川を伝って都市の汚水等々も流れ込んでくる。そうだとすると海の環境、伊勢湾の環境をよくするためにはどうしても陸地の問題に目を向けざるを得ません。森は海の恋人というなかなかロマンチックな題で出された本がありましたけれども、そういう視点がございまして海からにとっての森、海からにとっての町というのは非常に重要

になります。そういう形で視野を広げまして活動してまいった結果、
いろんな方々と交流ができました。

そういう中で、自然環境創造協会というものをそういう心あるとい
いますか、連携された方たちと共に今作っております、そういう県
内のいろんな環境の活動等々をやっている方々の総集結集と
して組織を作り、また活動しながら作っていくと同時に、伊勢湾関係の
一つのまとまった活動分野が作ったり行動したりすることができれば
いいなというふうに思っておりますので、また後ほどいろんな提案も
させていただくつもりですが、ご支援をお願いしたいと思っております。

野田

ありがとうございました。続いて畑井さん、お願いいたします。

畑井

私どもは漁業団体でございますので伊勢湾との関わりということ
いいますと、目崎先生が先ほどおっしゃって見えましたが、伊勢
湾が1万年前に今の形が形成されたとなりますと、そのときから三重
県下の伊勢湾の漁業者が伊勢湾と関わりをもっていたということにな
ると思います。

元来、海というものは水産と海運が先住民族だと言われております。
漁業者と船を使って物を運ぶ人たち、人を運ぶ人たちというのが海を
利用していた先住民族。その後、海洋レジャーの問題とかいろんなこ
とが出てまいりまして海が国民のものといいますが、いろんな方々が
利用いただける場所ということになってきているわけです。

そういうような形で伊勢湾は三重県の漁業にとって極めて大事なところでございまして、三重県の水産の生産金額が現在 700 億円というふうに言われておりますけれど、その部分の鳥羽地域も含めると約 200 億円ぐらいが伊勢湾で生産される。今の数字は三重県側だけの数字なんですけど、熊野灘等で獲る魚についてもやはり伊勢湾で産卵して外海に出て行く。また外から小さな魚が伊勢湾に入ってきて、そこで大きくなるまで成長してまた熊野灘、太平洋のほうへ出て行くというような状況というのもありまして、そういうことから考えますと私ども三重県下の漁業者は、伊勢湾は母なる海だと言っています。

そういう伊勢湾の中で環境問題というものを中心に考えるような形になりましたのは、昭和 30 年代の後半のときでございまして。皆さんご存知のように伊勢湾の四日市コンビナートの開発というものが出てまいりました。また名古屋を中心といたしました臨海工業開発というのが進みました。当時は臭い魚というのが新聞紙上等を賑わせました。伊勢湾から獲ってくる魚が非常に油臭い、変な臭いがするねということで食べられなくなった。流通ができなくなったというような状態がありました。そういう中で三重県では漁場を守る会というのを昭和 37 年に作りまして、工場とかそういう汚水を流すような施設のほうに対しまして、もっと水をきれいにしてくださいよという抗議行動を起こしたというのが 30 年代の後半から 40 年代の前半ということになります。

そういう経過がある中で、では私たち漁業者もいろんな環境を守る運動を起こしましょうということで昭和 46 年になりますけれど、海と川を美しくする運動というのを始めさせていただきました。水の循環というものを考えたときに当時は川をきれいにしよう、海をきれいに

しようということが大事なんだということから運動展開を始めまして、海浜に流れてくるゴミを掃除をしたり、海に流れてくる水をきれいにしてもらう運動というものをいろんな形で訴えをさせていただいたということもございます。そういう形で公害問題と海をきれいにする運動というのを始めてきたわけですが、当時から私ども漁業団体は地域の住民の方々とか、いろんなボランティアの団体の方々等に呼びかけもさせていただいて、どんどん普及の輪を広げようということ而努力してきたわけなんです、なかなか漁業者団体と陸の皆さんとの連携というのが進みませんでした。それは漁業者団体というのが当時公害闘争というようなこともあって、一つ組織としては異端といえますかそういう部分があったことによって、なかなかご理解がいただけなかったという部分があったのではないかというふうに私自身は思っています。そういう中で私どもとしては第一次産業の仲間たち、森林組合とか農業協同組合とかそういう団体のほうへ呼びかけをいたしまして、海浜清掃についてもその方々と一緒になって一部住民の方とかボランティアの方々の参加をいただく中で取組を続けてきたところです。

そういう状態が続いておりましたけれど、いったい私たちが伊勢湾の海をきれいにしようとしている運動、これでいいんだろうかというふうに反省をいたしまして、水というものを考えた場合にもっと広い範囲で環境問題というのを考えなければダメだということになりました、ちょうど北海道の漁業協同組合のお母さんたちが森に木を植える運動というのを始めたというのを聞きまして、三重県でももっと広い範囲で環境問題を考えよう。それには山から流れてくる水というものを中心にして環境問題を考えていくことはどうだろうかということで、

私たち三重県の漁師たちがまず宮川村の山奥に木を植えるという運動を始めました。平成9年のことでした。そういう運動を始めまして、今度は岐阜県の長良川の最上流部に白鳥町というところがあるんですが、そこへも木を植える運動というのを始めました。その岐阜県の白鳥町で木を植える運動というのをやる時に、私たち三重県の漁師たちだけではなくて、長良川、伊勢湾というものを考えた場合に岐阜県も川の民であるし、愛知県も伊勢湾を共有する漁業者がいるところだということで、愛知県の漁師と岐阜県の漁師と3県が連携して一緒に白鳥町に行って木を植えませんかという話をさせていただいて、現在その活動がずっと続いているということになります。一昨年からは同じ岐阜県なんですけど木曾川の上流部のほうに今、木を植えて流域の中でみんなが伊勢湾の環境問題というのを考えていただくというような取組を、現在、続けさせていただいているところです。

また私ども漁業団体でございますので、工場廃水なり家庭から出てくる排水の浄化対策ということにつきましても、さまざまな形で取り組んでいますし、私たち漁師自らも海へ出たときにはゴミをきっちり持ち帰ろうという運動というのも今、続けさせていただいているところでございます。

そういうふうな形で環境問題に取り組んできましたが、私たちは漁業団体ですから海から生産される魚、貝というものを大事にしなければいけません。そういう面で今、資源管理というふうに言っていますが、魚の卵や小さな魚、貝についても小さな物については獲ってももう一度放流して海へ戻してあげましょう。そのことによって伊勢湾に住んでいる魚たちや貝たちが伊勢湾の環境をもっとよくしてくれますというような取組を現在続けているところでございます。以上でござ

います。

野田

ありがとうございました。先ほど目崎先生がおっしゃっていましたが、常滑と鈴鹿ラインの南のほうがまだ十分考慮の余地があるよと、こういうお話でございました。どうぞお願いいたします。

目崎

先ほど図でご覧にいらしたように、伊勢湾を考えたときによく言うグローバルで言っても同じように南北問題といたしまししょうか、北の工業化に対して南はまだまだ比較的埋め立ては進んでいないし、かなり砂浜が残っていて自然に親しみやすいというように、一つ伊勢湾を考えたときにそれぞれ個性があるといっは何ですけれども、それと更に志摩の海とも対比しながら、それぞれの伊勢湾、あるいは三河湾というまたちょっと違って来るんですけれども、あまり全体で議論してしまうと薄められるので個々の自分の前の浜といっはなんですけれど、そういうようなものをやはり絶えず注目しながら活動、そのときは柏木さんやあるいは久米さんたちが阿漕浦でやっているというようなことはそういう運動だと思っんですけれども、それがなるべく徐々にその場所からだんだん隣の町、あるいは横にネットワークした同じようなつながりをどのようにして作っていくのか。それと畑井さんのところの海に出ている漁業者の方々と浜を守る運動とか、あるいは浜に木を植えたりなんかする運動というものがなかなか一体化できない。このことはもちろん行政の縦割りという問題も当り前だし、あるいは最近だと海のレジャーといっは何ですけれども、ヨットをやる人だとか

あるいは海で遊ぶといっちは何ですけど、ジェットスキーなり何なりも含めてそういうようなレジャー関係の人たちが、同じ海に関わりながら何かもっともっとどういう形でつながりを持って一つの海を守るなり見つめていくのかという活動をできないものだろうか。その意味でいかに連携をするのかということがまず第一段階だと思うんです。

その点これは海辺だけではなくて同時に先ほどの宮川でいえば宮川村の山の奥まで行って木を植えるところから始まるんでしょうけれど、何となく市民それぞれが海にもう少し親しむような単に海の日というよりも。私は三重県の祭りの中では7月11日のしろんご祭り、我々が今、直接海女さんが見えるとなれば、おそらく7月11日の鳥羽の菅島の白浜というところで1年に一度。年々少なくなって私が最初に見た頃は100名以上だった。去年なんか波が荒くて確か今年は50名も出なかったというんですけれど、海女さんたちが皆で一斉に稚貝のアワビを獲ってしろんご、白髭神社に奉納するような祭りがあるんです。三重県は海女さんの国だといっても外国人が私のところに来て、海女さん見たいといっても、結局、御木本真珠島のああいう観光を見せるしかないわけです。まさに、こうやってお祭りを通してしか、あるいは和具の潮かけまつりに行かないとなかなか直接海女さんがそばで見えるということがないんですけれども、でもそういうような海を通しての祭りというのが私はこれほど生き生きと今日まで、同時にいうと船の祭りなんかでも、例えばこれは熊野灘に行けば二木島の二木島祭りのように神様を沖合いの神社から迎えるために両方が競争する御座船なんかというのものもあるけれど、そういうものが実際に伊勢湾の中だと四日市に鯨船というので海には出られないから陸の上で関船を引っ張って鯨捕りの所作を道路の上でやるといったような祭りに変わって

きているわけです。

このことから古代から祭りを通して、あるいはしろんご祭りの7月11日の後、昼間見て津に戻ってきて、その晩津市でも7月11日の夜は白塚でやぶねりという祭りがありますよね。これは津市で一番荒々しい祭りだといわれているけれど、これなんかも最後にヤブを練った後に白塚の浜辺にみんなが災いをつけたヤブを津島神社側に海の中に入れてみんなで、真っ暗闇の海の中に入れて北のほうにそのヤブを流すというような神聖な部分、荒々しくて神聖な部分があるんですけども、海といったようなものがこういう形でまだまだ生き生きとして残っているんですね。こういうものを通してやはり祭りといっっては何ですけど、大事なことは例えば海岸の清掃にしても、海を守ろうといっても、あるいは皆で船を出して、あるいは花火大会にしても、やはり今我々は何か環境を守るとか、何かイベントをやるということが同時に楽しみになるような祭り化しないとだめだと。海を守る、ただ海の日を制定すればいいというものではなくて、海を守るような何かお祭りをたくさん浜辺でやれるようなそんなようなことがやはり望まれるし、そういうことを通して行政なり、市民なり、あるいはそういう祭りを作ることによって活動の輪がだんだん広がっていくのではないのかというように思っているわけでありまして、あまり行政側、あるいは漁業者側ということではなくて、海の祭りなんかには漁師さんじゃないんですけれど、漁業者あたりの参加する海の祭りに町の祭りが合体するような形で協働でいろんな祭りができていくと、もう一つ海に対するつながりみたいな連携ができるのではないのかというようなことを考えたことがあります。

野田

ありがとうございました。確かに伊勢湾は閉鎖性の海域でありまして、水の交替が非常に悪い、効率が悪い欠点がございまして、同時にこれが温暖な私ども三重県の沿岸の気候と密接な関係がございまして、そして山の幸、里の幸、海の幸を生んできたわけでございます。この三つの関係が上手くいくように水の循環が先ほど来おっしゃってますようにどのようにしていっていいのかということがたちまち問題になってくるわけでございます。

海は以前に比べたら非常に遠くなりました。先ほどお話がございましたようにだいいち泳ぐ人がいない。そういうことで危ない、汚いというような問題。先生のおっしゃったようにいかにして祭りとして楽しくもっと親しいものとして海を感じさせる手立てを講じなければならぬ。そういうようなことも含めて我々のやるべきことはたくさんあると思うんですが、もう一つ生活雑排水の問題がございまして、いわゆる我々の生活そのものがこの沿岸海域に住む我々の生活様式そのものが海の履歴書になっているわけで、その生き方が結局海に反映されているということが非常に考えなければならないことではないかというふうに感じるわけでございます。

先生のおっしゃる終末処理場にならないこの伊勢湾をこれから立ち上げていくために、具体的な、そして積極的な提案をもう一度4人の方々にお尋ねいたしましょう。

柏木

もう少ししたことをご紹介しますと、例えばその中の一つにこのゴミは燃える、燃えない、どこに分別したらいいの、資源ゴミなのかプ

ラスチックなのか、市町村によって皆違うんですけども、津市の場合はどうなのかというようなことをクイズをしたりしたこともあるんです。やはり海が海岸がゴミ箱になってはいけない。海水の汚染が進んではいけないという問題意識からやってきましたので、私たちがやったことがお祭りなのか、イベントなのか、いろんな環境プログラムの中のものを引っばってきてやったのかと言われれば、自分たちがこれはやって関心を持ってもらわなければいけないのではないかというレベルでいろんなことを企画してきました。やはり海に関心を持って欲しい、そのコミュニティーの場として復活して欲しいというようなことを動機付けでずっといろんなことをやってきたような気がします。

私どもの活動のもう一つに、協働ということで市や県との協働で食堂の経営、運営をしているんです。食堂をしていますからゴミがたくさん出ます。生ゴミも出るんですけども、最初は汚したくないということで自分たちが持ち帰っていたんですが、そんなことも長く続かないということで助成金をいただいてゴミの乾燥をして堆肥化するという簡単な機械がありますが、そんなものを導入したりということで、ゴミに関わって関心を持つことによって環境問題も意識ができ、活動の中にもフィードバックし、活動のいろんなイベントの中にもフィードバックさせながら、これが決め手だというのはありませんが、私たちがなりにいろんなことをしてきてみました。そんなところです。

野田

ありがとうございました。久米さん、お願いいたします。自然環境創造協会を立ち上げていらっしゃるということでしたが。

久米

海岸とか水質の浄化の問題につきまして細かいことについては、細かいといえますか具体的なことについては思っていることもございますが、私、自然環境創造協会というのを立ち上げさせていただいて12月1日にその法人設立結成集会をやらせていただくわけですが、その集会には畑井さんも始め、漁業関係の方、林業関係の方、農業法人の方々、いわゆる3協会の方々も参加されます。もちろん私のようにNPOの立場の者も参加させてもらいますが、また会社の方々も参加する。そういう意味で今後、伊勢湾の問題を取り組んでいくのには、言われたとおりですけれども行政だけではもちろんできない。民間の一部の心あるものが何かやっている程度ではことは済まないわけですから、県民総ぐるみといえますか、産業やまちづくりと結び付いた形でやらなければならないというふうに思っています。

それで愛知万博というのがやられることになっています。3年後ですけれども、あれは愛・地球博というテーマで設定されています。しかし実際に想定されている地域は問題になりました海上の森とか青少年の森とかというようなところの非常に狭い地域でパビリオンを作って、多分従来型の形で多くの方々が成功を危ぶんでいると思うんです。しかしそうであっても隣の県ですから近づいてくれば何らかの盛り上がりもあり、我々三重県の間人も単なる見ているだけではすまない状況も来るかなというふうに思っています。私としては世話役は協会引き受けさせていただきますから恋・自然博というのをやりたいなというふうに思っています。

恋というのは恋愛の恋ですけれども、恋なくして愛も実らずみたいな形である種の愛知万博のプレ万博版ですけれども、愛知万博をある

意味では応援するというか誘導する。そしてフィールドとしては三重県全部を使うべきだと思いますから、当然伊勢湾というものも一つのフィールドになる。その三重県というものが先ほど目崎先生の話にもありましたが、山脈の問題や木の問題もありますし、植性の問題からしましても鈴鹿山脈あたりには典型的に北の植物、南の植物が混同しておりますし、いろんな古代的な動物もいる。結構いるんです。典型的にはカモシカが、最近では林業の害も与えていますけれども、カモシカがいてオオサンショウウオがいるとかそういうこともございますし、また心の問題といえますか万博を意識すれば、外国を意識すれば日本ということが問題になります。三重、愛知の問題ではない。そうすると日本というものを考えた場合に伊勢神宮、最近では熊野古道の問題もありますし、ヤマトタケルノミコトの話があって三重という名前がついたということもございます。そういう神話的というかそういうものがある。松阪には本居宣長という人がいて、津には谷川士清がいた。そういう人たちの研究なり思いというものは、日本の心といえますか物の哀れというか、日本とはこういうものではないだろうかという心の問題を取り上げておられます。

だからそういう点では三重県の自然を全部のフィールドとして、三重県は34%が公園指定になっておりまして、滋賀県に次いで多いところですが、滋賀県は基本的には琵琶湖というのがとんでもなく大きいからパーセンテージは大きいですが、三重県は日本で2番目にパーセンテージの多いところだと思います。その点では海、山、川もあり盆地もあり平野もあるというところですから、海一つとっても伊勢湾のような内海の部分、砂浜部分と志摩のリアス式、熊野の灘という形の部分もあります。そういうものを全部をフィールドにしてそれ

それぞれの思いで市町村も加わって、観光部門は観光に力を入れるということも大事でしょうし、自然環境をよくするというNPOの活動も大事でしょう。それから産業の活性化の問題もある。

そういうものを皆ひっくるめて同じ恋・自然博 in 三重というようなテーマで取組をしてみてもどうかということをご提案させていただきたいし、賛同いただいて、2004年ぐらい、あるいは4年、5年にかけてそういうことを取り組む中で伊勢湾の問題は重要なテーマとして取り上げていくというのも一つの案ではないかというふうに思っておりますので、それを言わせていただくために今日お邪魔したようなところもございますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

野田

ありがとうございました。先ほど山の植林の広域的な運用という話を畑井さんしていただきました。どうぞ引続いて。

畑井

先ほど私たちが漁業者団体として漁民として山のほうに木を植えに行っていますよという話をさせていただいたんですが、そのことによって今度は山の方々が海の清掃に参加していただくような状態が出てきました。これは私たちが山に木を植えに行っているから皆さんも海の清掃に来てくださいよ、ということではなくて、山の皆さんが自主的に、俺たちの流している水は最後に海に行くんだね。山で切った流木がひょっとしたら貴方たちの海浜清掃しているところに流れ着いているかもわからない。それだったら私たちも漁業団体と一緒に海浜清掃をやりましょうよ、という動きになってきました。

もう一つ岐阜県の白鳥の皆さんは先ほど言いました漁業者がそのような小さな魚を放流しているということであれば、その放流している現場に行って私たちも手助けさせてください、一緒に放流しましょうよという動きが出てきました。今年8月24日に三重県で豊かな海づくり大会というのを桑名でやったんですが、そのときには岐阜県の東白川の小学校4年生、5年生の子供たちが一緒に干潟の勉強をさせてくださいということで、長良川の河口にできた人工干潟、そこに長靴を履いて入って行ってアサリやハマグリやいろんな魚を探しながら交流が持てたというような状態が出てきています。そうしますと伊勢湾というものを考えた場合に、今日は三重県ということになるわけですが、岐阜県も愛知県も名古屋市も長野県もそういう伊勢湾に流れ込む川の流域に住んでいる人たちが一緒にいろんなことを考えないと、伊勢湾という海を考えないと決して伊勢湾の海の再生ということとはできないんだろうというふうに思っています。

三重県の科学技術振興センター水産研究部鈴鹿水産研究室、非常に長い名前なんですが、鈴鹿市の白子というところに旧の水産試験場というのがあるんですが、その水産研究室の中では伊勢湾のいろんなデータが詰まっているわけです。その方々は非常に熱心に他の大学と連携しながらデータ集積をし、伊勢湾の状態というのはいろんな研究がされているんです。そういう研究というものをもっと愛知県とかいろんなところに広めて行って、その連携の中で伊勢湾の再生のプランというのができればいいなというふうに思っています。

三重県のほうはいろんな情報発信を今やっていたいただいているんですが、今日、岐阜県と愛知の方はいらっしゃらないと思いますので言いますけれども、岐阜県の多治見で今年の春、山火事がありました。そ

のときに三重県の桑名の海苔の漁師たちが「山火事後片付けに俺たちも行きたいよ」と8月に60人ぐらいの桑名の海苔の漁師さんたちが多治見に行って山火事後片付けをしたんです。愛知県にもいろんな話をしていますが、それはまだなかなか実現はできていませんが、さっき言いましたように長良川、伊勢湾を守ろうということで愛知の漁師と岐阜の漁師と三重の漁師たちが一緒になって山に木を植えているということを考えますと、行政のほうでももっといろんな形で情報発信をしながら、スクラムを組みながら伊勢湾というのを考えていただければなというふうに思っています。

海の男というのは昔から相互扶助というのが非常にいきづいているところなんです。具体的な例で言いますと、海難事故が起こりますと漁業者はプレジャーボートの方であろうと、海運の方であろうと、漁をそこで止めて人を助けに行きます。海の男というのは、そういう形で相互扶助といいますか一緒になっているいろんなことを考えましょうというものが長い伝統の中でいきづいているわけですから、そういうようなスクラムというか協働という活動が伊勢湾という海へ流れてくる流域全体で取り組んでいただけるような方策を講じていただきたいなというふうに思っています。ちょっと長くなってすいません。

野田

ありがとうございました。目崎先生、お願いします。

目崎

伊勢湾の連携をするときに、今は市民の方同士ですと、例えば県を越えたり市町村を越えて連絡を取り合うというのは意外と簡単にでき

るんですね。ましてやこの10年インターネットができるようになったものですからそれぞれのホームページですぐ連絡をし合って、町の会を町でやろうなということがすぐにできるんですね。具体的に例えば沖縄のサンゴを守る会、あるいは沖縄で飛行場でジュゴンが、普天間飛行場の沖合いの代替の基地のところにジュゴンがいるものですから、ジュゴンを守ろうという運動はそれを津の駅前でやっている方がいるわけです。これはみんな連携し合ってネットワークで、津のサティで毎年署名活動をやっていたり、沖縄のジュゴンを守ろうという運動は全国的な広がり、インターネットや市民レベルのネットワークの速さというのは非常にピッチが早いんです。

問題なのは、伊勢湾という問題を検討するときに例えば堤防造るんだとなると、河川局だ、構造改善局だといったようなことで三つ四つになるし、港というと別の港湾局がやっているんだといったように、行政側の縦割り条件でなかなか伊勢湾というなかで、ようやく三重県の中にも宮川ルネッサンス室ができたみたいに、伊勢湾室みたいなものがまず三重県あたりにできないと、これができた後に愛知県側にこういうのを作ってというので愛知県と一緒になるとか、あるいは岐阜県にも伊勢湾対策室みたいなのを作ってもらって、何か伊勢湾に関わることは全てそこが行政側として対応できる部分。そうすると今度は環境省なりに国のレベルでもそういうようにしてくれというので、というように市民のほうがこれだけ活動してネットワークができたんだから、今度は県庁なら県庁、あるいは市町村なら市町村レベルの行政サイド側でまずネットワークを早急に三重県から構築をして、それを今度は直接、岐阜県や愛知県側に。

私が今、愛知県の南山大学に行ってみてわかることは、三重県のフ

ネットワークの速さだと思うんです。三重県は知事が代わったこともあるのかどうか、大きな時代の変り目でとにかく先頭を走るのが三重県の良さですから、先はどうであれ、とにかく一番最初にまず三重県から日本で最初にこういう枠組みを作る。このことは多分、三重県の漁業組合もおそらくそれは得意なところですので、漁業組合なら組合、あるいは市民なら市民と、それを行政側の構造改革にもっていくような仕組みで、そうしない限り伊勢湾ということが、それで私から言えば日本の中に伊勢湾の調整機構とか何か大きなシステムみたいなもの。

そういう中であらゆる伊勢湾の問題、その中に博物館も必要かもしれないし、何かオーストラリアのグレートバリアリーフみたいな管轄するような、マリンオーソリティーみたいなそういうシステムみたいなものが伊勢湾にできていくことが。しかしながらあくまでそういうときに市民から全てそういうものが今の時代は発動する。

更にそういうことが進めばインターネットを通して世界中にこういう閉鎖性海域の大都市の海や、ましてやこれから飛行場ができるわけですから世界中と結び合う本当の意味での人と人とのつながりで結び合う箱庭的な海がいいのか、あるいは庭園的な海がいいのか、何か新しい日本の姿を国際的に提案できるような何かそういうことをまずは市民が徹底的に走ることによって、後は三重県から徹底的に走ってもらうことによって、とにかく万博が始まるとはいえ、あるいは目の前に飛行場ができるということにもう国際的なゲートとして、そういう意味では次の遷宮には何とか伊勢湾には船からも、船から伊勢神宮の遷宮に大湊を通して船から、飛行場からも含めて船で伊勢参宮ができるような、あるいは木曽川から御木引きをしてきて、木曽の山からトラックで持ってこないで日曜日毎に船で伊勢まで運んでくる御木引き

をするような、そういうような何かグローバルな伊勢に集まるシステムと言いましょか、新しい仕掛けを含めて伊勢湾というものを世界的に提案する。あまり国内的に考えるより今は先にグローバルと言ったほうが早いものですから、そうすると非常に意味が出てくるのではないかと思うわけです。

野田

ありがとうございました。大変短い時間でございまして、しかも演者もこのようにして限られておりますので時間があっという間に経ってしまいました。

今日お渡ししておりますリーフレットの8ページの5番目のところに「伊勢湾再生に向けた共通基盤」と書いてございます。三つの段に分かれておりまして、調査・研究というのは先ほどおっしゃっていただいた研究でございますが、これはまた専門家の知恵を借りて、実際に継続して進めていきたい。それから2番目の参加・実践、3番目の情報・交流というキーワードにつきましては、演者の方々がこもごも既に具体的な内容についてご説明いただきました。そういうことで重ねて申し上げますが、伊勢湾をよりきれいにしそして皆さんが使い勝手の良い憩いの場所として、しかも実用の場所として上手く使っていく。あるいはいろんなコンサートも含めた今おっしゃった様々なお祭りの場所としても使いたいと。そういうふうにしてなるためにどうしたらいいかということについていくつか例を引いてご説明いただきました。

ここで時間がまいりましたので恐縮ですが、せっかくご参加いただきました皆さんにご発言の機会を差し上げたいと思います。何でも結

構でございます、お手を上げていただいております、お聞きになりたいことを、どうぞ遠慮なくご質問いただきたいと思います。

質問者 A

伊勢の と申します。いろいろ貴重なお話をきかせてもらったのですが、いろいろこういう活動してもらっている方々のご苦労のわりには全体的に見て成果が出ていないような残念な気持ちがしているのですが、もう悲観的な見方なんですけれどももう世紀末的なところまで来ているような気持ちもあるんですが、私は実は阿児町の漁師町の出なんですけれども、最近では太平洋側にある磯がもう全滅に近い状態なんです。私の母親も 86 歳ですけど、私たち兄弟はもうほとんど母親に育ててもらった。堤防の外に海女小屋があって、かなり海女さんの収入源で生活していたという事情もあったのですが、それが今は海草が絶滅に近い、育たないというか。そのために海女さんのドル箱であった魚介類もほとんどメスがオス化しているとか環境ホルモンとか言われている現象が起こっているわけです。

この前、答志の方へ用があって行ったんですけれども、かなり海がきれいなんです。先ほど話が出たようなんですけれども、ちりめんじゃこというんですか、そういうものが捕れるところはあの辺しかないとか、かなり海のきれいなところで、大阪のほうから見えていた方で釣りをしに来ていた方に話をさせてもらったんですけれども、最近様子がおかしいと、やはり海藻類が少なくなったなど、魚も今までのように釣れないと、沖へどんどん出て行かないということになって寂しい思いをしているというような話をされていたんですけれども、先生方いろいろ熱心に活動されているというのはよく話を聞かせてもらってわかる

んですけれど、その成果が見えてないようで、もう手遅れのような感じがしないでもないんです。環境ホルモンそのものが忘れられていた。酸性雨のことに対しても忘れられていると。それがみな関わっている。人類が滅亡するのではないかと、石原知事なんかもそういうことを熱心に話をされていますけれども、活動でも行政との連帯がなければ末端のほうでどれだけ運動していてもどうにもならないのではないかとというような悲観的な気持ちでいつもどうなるのかなと。若い人たちに受け継ぐようなことが難しいのではないかとというような悲観的な見方をしているんですけれど、そのところ目崎先生あたり、他の方も含めてですが。申し訳ないです。

野田

今おっしゃっている磯というのは場所は何処ですか。

質問者 A

安乗です。この先、太平洋みたいなところで私たちずっと育ってきたんですけれど。寂しい思いをしています。

伊勢のほうに回してもらってから 20 年余りなるんですけれど。たまに行くと言師もダメだと。今はフグでかなりいいようなことを言っていますけれど、それも最近、今までそうではなかったのにおかしな現象が起こっているというのか、嬉しい悲鳴ではあるんですけれど、フグが大漁ということは、今までフグが大漁だったところが漁がなくてこちらに移ってきたというのか、何か生態系の何かでおかしな現象が起こっているというような話を聞いたんですけれども。

畑井

安乗のほう、志摩郡のほうにも磯焼けという形で私ども行っておりますが、磯のほうに海草がなくなっている状態というのが出ているというのは確かなんです。

当初、尾鷲市とかその辺で始まりまして、その原因というのはいろんなことが考えられるんですが、尾鷲市で特に顕著なのは、尾鷲のほうは石が取れるんです。山土が取れます。そういうところでどんどん山を削ってしまったことによってその土が自然に出ているわけですから、大雨の後どんどん小さな湾へ流れてきて、それによって海草がなくなっていったという説が一番有力なんです。志摩郡のほうにもそういうふうな状態というのが出てきておりまして、私ども漁業団体のほうも県なり市町村のほうと色々な形で連携をとりながら磯焼け対策というのを講じてきているわけです。ただなかなかそのことが効果的には現れてはいないという現状があります。

ただそのことで絶滅をするとかということも心配される気持ちは十分わかるんですが、私、今年に入りまして自然の力というのはすごいんだなと思ったのは、新聞報道なんですけど愛知県の知多半島の人工海浜をしたところに海亀の産卵がされたという情報があった。

もう一つ、先ほど桑名の人工干潟のところに岐阜県の方が来られましたよと言ったんですが、人工海浜、人工的に干潟を造ってそこが再生できるとは思ってなかったんです。ところがそこに入ったら10数センチのハマグリとか、車海老だとか、アサリとかそういうものがそこで生息していたんです。長良川河口も人工的に砂を入れたところなんです。3年ぐらい経ってそういうふうな大きな生物がいたんです。結構、自然の力というのは大きいんだと思うんです。みんながい

ろんな形で工夫をすればそういう状況というのも、伊勢湾を再生する状況というのも生まれてくるのではないかなと。そういう面では行政なり研究機関の力というの大きいと思うんです。

私たち団体の力というの非常に弱いですが、そういう形で行政なり研究機関、地域の住民の皆さんが一緒になってやっていくことが非常に大きいのではないかと。そのことによって志摩郡とか熊野灘の沿岸の磯焼け対策というのも何らかの対応策を全体的に講じることによって、明るい兆しが出てくるのではないかなというふうに思っています。

質問者A

もう1点、お聞きしたいんですが、毎年、3万種類ぐらいの動植物が絶滅しているという記事を目にしてそれをずっと気にしているんですけど、そういうことについて何か関心を持たれた方がいらっしゃいましたら一言お願いします。こういう質問は飛躍しすぎるというか、そういうことで楽観的なような答えをしてもらったような感じで申し訳ないんですが、そういうことを聞かせてもらおうとかなり先の明るさも見えるような気もするんですが、その反面、どんどん動植物が絶滅していることに対してはどういうふうな思いがあるか一言で結構ですが。

久米

お答えになるかどうかわかりませんが、今のお話は産業革命以来の話で、世界中を合わせたらそうなるんでしょうけれど、数字だけ挙げるとそういうことなんですけれど、まだ我々の知らないことがた

くさんありまして、日本なんかでも確かに絶滅危惧種とか絶滅種がいっぱいあるんですが、私たちの立場なんかでいうと一番日本の中で開発とかが早いところが集中している海岸とか沿岸のレッドデータブックも完成していないような状態なので、安心はできないんですけど、早くそういうふうに関心を向けて、環境問題とも絡んでいますのでね。ただ3万種というのは世界的にそうなんでしょうけれど、逆にいうと我々の知らない種類がそれに負けないくらい発見されていますから、良いとはいえないんですけども、それほど悲観することもないという感じなんですけれども。

質問者B

愛知県の といいます。畑井さんからは愛知県、岐阜県は来ていないだろうというお話でございましたので発言させていただきますが、役所の連携が足りないのではないかというような話がありましたが、愛知、三重、岐阜の3県と名古屋市で伊勢湾対策協議会というのを作っておりまして、今日はそれぞれの担当者がみんな来ておりまして、岐阜からも名古屋市からも来ておりますのでまずご紹介させていただきます。

久米さんから恋・自然博というお話がありましたが、愛知万博、特に愛知県出展の山根プロデューサーは海上のパビリオンももちろんあるんですが、愛知県内全体がそういう環境問題に取り組んだとか、愛知県全体でそういう取組をやった代表がパビリオンでやる。愛知県全体がパビリオンというような方向で取り組んでおりまして、久米さんのおっしゃる三重県発の恋・自然博というのはそういう趣旨に非常にあっておりますので私ども楽しみにしております。よろしく願います。

たします。

質問者C

小俣町の といいます。下水道の大規模施設がたくさん伊勢湾に面して造られていると思うんですけど、伊勢のほうも今度できるということなんですけれども、これまでに行っている下水道浄化センターが伊勢湾に及ぼす影響、もしマイナスの部分があれば今度伊勢のほうに造るときに活かせるのではないかと思うので、そういう研究をしておられるかどうか知りませんが、教えていただけますでしょうか。

久米

ご質問にありましたようなデータについては私は専門でもないのかわかっていないんです。だけど今、行政なんか考えているそれしかないという観点で取り組んでいる傾向があると思いますし、パーセンテージを挙げて、例えば津市なんかの場合でも下水道の普及が悪いのでまたそれを上げてと、下水道の普及率を上げていけば水循環がよくなるというように単純に思っている分野がまだあると思うんです。

その考えを今、大きく変えていかなければならないので、私としては非常に曖昧なことですけども、これから一番研究なり問題を立てていかなければならないのは、大地の浄化能力をもっと活用することが非常に大事だと思うんです。雨水一つにしましても全部樋から流してしまっているんです。そういうことで最も都市化が進んだ東京では水脈が全部なくなってしまって堀にしても池にしても枯れてきてしまっています。

要するに水の部分がなくなっているのでより一層蒸発することによる気化熱がなくなりますから、都市部が熱くなって、そういう傾向もありますので、観点を自然によって浄化するという観点到大きく変えて、それなりに英知もあるんだらうから研究をその視点到力を入れていかなければ多分根本的な解決にはならないのではないかな。薬品変えたら少し何とかというレベルはもう多分限界だらうと思うし、そんなことしか言えませんが、我々自身がこれからはもう少し観点を变えて、水を台地に染み込ませていくというような部分、水の部分を我々の生活の部分に多く感じていくという部分が一番生活感覚としても大事なことだと思っています。

野田

今のご質問の中で非常に重要な示唆がありましたのは、例えば一時環境ホルモンの問題がございましたし合成洗剂の問題もありましたよね。大騒ぎしている中で今はもうさっぱりない。それではもう使わなくなったのかというと、心配している物質はまだ相変わらず使われているんです。例えば界面活性剂みたいなものが。その追跡が行われていない。それなんかデータとして出ていると思うんですよ。その辺もきちんとやりながら、下水道でそれらのものがきちんと処理され得るのかどうか。とりあえずそうしなければいけないと思います。

質問者D

今のご質問の話です。私、と申します。実は伊勢湾、川、山これを一体だというふうな観点到取り組むのが妥当だと思いますので、今の集中浄化槽の問題なんです、川から見ると極めてまずいと。

要するに今、久米さんがおっしゃったとおりでして、パイプラインで上から上水道で水を引いて家庭で水を使ってそれをパイプラインで海岸まで持っていくと、途中で一切地面に戻らないという仕組みを作ってしまうわけなんです。これを非常に憂えています。だから川にとっては結論から申し上げますと、パイプラインは極めて迷惑な施設だというふうに思っています。ご参考までに。

野田

大変示唆に富んだいいご指摘でございました。ありがとうございます。

それではだいたい予定の時間がまいりました。今日お渡しいたしましたリーフレットの5ページのところにどうあるべきかということが書いてございまして、基本理念・あるべき姿というのがございます。これを見ますと赤のところでは次世代への健全な伊勢湾の継承と書いてあります。まん中辺に書いてございます。これは有名なこの言葉の語源はどこかの先住民族の方のお一人が自然は先祖からの遺産ではない。次の世代からの買い物であると言っているんですね。ですから我々が勝手にこの大事な環境を改善して勝手に使えばなしにするということは、そういう権利は与えられていないというふうに痛烈な文明批判だと思うんです。

したがって健全な伊勢湾の継承ということがまさにずばりと書いてございまして、言うは易く行うは難いわけですが、皆でさまざまなこれはどうか行政だとか国だとかそういうものに全面的に、もちろん責任がございまして責任の部分で一生懸命おやりいただけるだろうし、三重県はとりわけフットワークがいい。特にビジョン策定については

断突のスピードでやるという特色がございます。そういう点で私ども一生懸命にやらさせていただきますが、それにしてもやはり住民一人一人の責任で、県民一人一人の責任でこの三重県の、とりわけ伊勢湾の健全な姿を再度作ろうではありませんか。

そういうことで今日の非常に貴重な時間をいただきましてありがとうございました。シンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会

それではこれもちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。コーディネーター並びにパネリストの皆様どうもありがとうございました。また会場の皆様も貴重なご意見ありがとうございました。

以上をもちまして本日のシンポジウム「私たちの大切な海・伊勢湾」を終了いたします。皆様、長時間に渡りご静聴いただきまして誠にありがとうございました。

なお本日のシンポジウムの内容につきましては、後日講演録を作成いたしまして、三重県のホームページに掲載すると共にご希望の方には郵送させていただくご予定であります。ご希望の方は受付の際お渡ししましたアンケート用紙に記入をお願いいたします。ご協力いただきましたアンケート用紙はお帰りの際、受付に備え付けの回収箱にお入れください。

なお本日と明日は身近な自然を体験する県民デーとして環境創造活動を進める三重県民の会、及び三重環境県民会議によりまして各地でイベントが開催されております。ぜひ多数ご参加ください。

本日はお忙しい中ご来場いただきまして誠にありがとうございました。

平成15年2月

三重県総合企画局 企画・総合行政チーム

〒514-8570

津市広明町13番地

電話 059-224-2062

FAX 059-224-2075

e-mail kikaku@pref.mie.jp